女子美術大学
「平成 21 年度　質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信

素材と環境教育を通した体験フィールド創出プラグラム

平成 22 年度活動報告サイト　PDF 版

女子美術大学　教育研究事業部

Copyright 2008　JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved
本 PDF ファイルに掲載の画像および文章を無断で複写・複製などの二次利用することを禁じます。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

もくじ

http://www.joshibi.net/brand

プログラムについて

もくじ 2

平成 22 年度プログラム活動報告 3

A_ 紙プロジェクト 4

B_ 絵具（顔料）プロジェクト 8

C_ 素材ミュープロジェクト 11

D_ デザインミュープロジェクト 14

E1-1_ 注染手拭プロジェクト 16

E1-2_ 注染 B 反手拭プロジェクト 18

E2-1_「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展 20

E2-2_「b・tan ぬぐい」パリ展 22

F_ 糸が結ぶセルビアと日本 24

G_ 環境論 + 29

H-1_ にこぷん 33

H2_ エココン・活動受賞歴 _ にこぷん 35

H3_ オーストリッチーズ _ にこぷん 39

H4_ わたけん _ にこぷん 43

H5_GM_ にこぷん 46

H6_baishakhi_ にこぷん 51

I_ 素材環境教育プロジェクト 54

J_ 青陵高校陶芸コース・コラボレーション 57

K_ 環境マッププロジェクト 60

L_ 環境ポスターコンペプロジェクト 64

女子美術大学　相模原キャンパス：〒 252- 8538　神奈川県相模原市南区麻溝台 1900　杉並キャンパス：〒 166-8538　東京都杉並区和田 1-49-8
お問い合わせ：教育研究事業部　042-778-6144

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

平成 22 年度プログラム活動報告　http://www.joshibi.net/brand

これまでの取組から継続、発展してきたプロジェクトも含めて、平成 21 年度に活動のあったプロジェクトを紹介します。

A_ 紙プロジェクト
B_ 絵具（顔料）プロジェクト
C_ 素材ミュープロジェクト
D_ デザインミュープロジェクト
E1-1_ 注染手拭プロジェクト
E1-2_ 注染 B 反手拭プロジェクト
E2-1_「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展
E2-2_「b・tan ぬぐい」パリ展
F_ 糸が結ぶセルビアと日本
G_ 環境論 +
H1_ にこぷん
H2_ エココン・活動受賞歴 _ にこぷん
H3_ オーストリッチーズ _ にこぷん
H4_ わたけん _ にこぷん
H5_GM_ にこぷん
H6_baishakhi_ にこぷん
I_ 素材環境教育プロジェクト
J_ 青陵高校陶芸コース・コラボレーション
K_ 環境マッププロジェクト
L_ 環境ポスターコンペプロジェクト

女子美術大学　相模原キャンパス：〒 252- 8538　神奈川県相模原市南区麻溝台 1900　杉並キャンパス：〒 166-8538　東京都杉並区和田 1-49-8
お問い合わせ：教育研究事業部　042-778-6144

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

A_ 紙プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中
参加学生：絵画学科、デザイン学科
担当教員：美術学科 馬場章
場所：本学相模原キャンパス、女子美術大学附属中学校、弥栄小学校

■プロジェクトの概要
本プロジェクトは「紙漉き」を通して紙について学習することを目的に、「紙の歴史」「身近な植物繊維から紙を作る」「紙漉きに関する指導法」の項目からなっています。
近代、工業化による大量生産・大量消費社会へ発展し、画材や絵画の支持体も工業的に生産されるようになり、学生たちが素材を探求する機会が減ってきているように感じられます。本プロジェクトでは、専門教育機関ならではの素材の研究に取組み、工業化でみすごされてきた「素材」の力を学生たちが再認識することで、表現活動の広がりにつなげてゆけることを目的としています。紙素材の探求を、「基礎知識」「素材実験」「簡易な製造法の開発」「学生の技術力向上」「普及（体験学習）と展開」という 5 段階で展開しました。さらに習得した学びを活かし、学生は地域社会とのワークショップなどを通じて、主体的に他者へ発信・提供しました。

■成果
1. 紙を漉いてカードを作る
日時：2010 年 8 月 23 日・24 日
場所：女子美術大学付属中学校　3 号館 1 階
参加者：中学生 6 名
ティーチングアシスタント：大学院生 2 名
【内容】
女子美術大学付属中学校で和紙と洋紙のカードを漉き、その湿紙に色付きのパルプで絵を描きました。

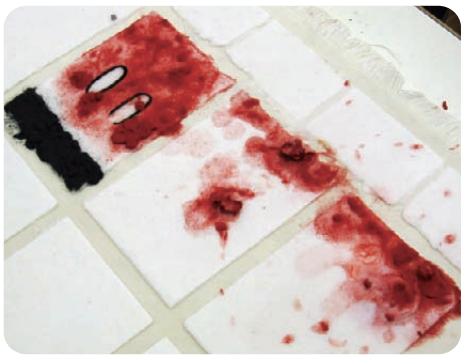
1_ 紙パルプに使う顔料（水彩絵の具の顔料）

2_ 紙パルプを作る

3_ 試し描き

コットン原料は、大学の設備でパルプ化して中学校に搬入しました。短繊維のコットンだけでは弱い紙になるため、少量の楮繊維を混ぜて紙の強度を増しました。1 回で 8 枚の葉書大の紙が漉ける枠を使い、溜め漉きでカードを漉きましたが、中学生には枠にすくった水が重いため、手伝いが必要でした。
その後、漉いた紙を脱水機の上にひいた厚手の布の上に伏せて脱水します。その布ごと机に運び絵を描きました。普通は、乾燥した紙に絵具で絵を描きますが、今回は絵具を紙に定着させるために糊分（固着剤）として水彩はアラビアゴム、日本画の顔料はニカワ（油彩はリンシードオイル）などを用いています。その糊分が乾燥して固化することで顔料が紙の表面に固着します。
色パルプは、水に紙パルプと顔料を混在させ、紙漉きに用いるネリを加えることで、水にネリの成分が溶け込み、顔料は繊維の方に吸着し、パルプに色が着きます。色材は乾燥する時に紙パルプと基盤の紙が結合し、顔料をくわえ込むことで定着します。そのためにパルプを盛り上げたり、水溶きして薄く流しても展色（＊注）することができます。
あわせて、楮和紙と封筒の紙を漉きアクリル板に貼って乾燥しました。
(注) 展色：「色を展（のば）し定着する」こと

4_ 容器を使って描く


5_ 紙パルプで描く

結果：
コットン紙と和紙の質の違いは理解できた様子でした。むしろ色パルプで絵を描くことの方に強い興味を示し夢中になっていました。絵の具で絵を描く場合、どのように描くかが興味の対象となりますが、この紙パルプは細やかな表現には適しておらず、盛り上げの効果や滲みといった偶然性に特徴があり、遊び感覚で描くことができます。失敗すればまた紙を漉くことから始めればよいため、大胆にトライできることができます。そのことで生徒達は気楽に挑戦できたようです。

6_ 滲みが面白い

2. 栽培した植物（トウモロコシ）で葉書を漉く
日時：2010 年 11 月 14 日
場所：弥栄小学校
参加人数：15 名
指導員：大学院生 2 名
内容：
相模原市立弥栄小学校では、地域在住の講師を学校に招き、児童に学校の授業では行えない内容の講座を開いています。
この講座では、児童たちが小学校の校庭で育てたトウモロコシの茎が紙になることを体験。農業廃棄物になってしまう素材も植物であれば紙にする

7_ そろそろ完成

ことができることを知ることができました。同時に普通の紙原料としてコットンの紙も漉き、その違いについて学習しました。
まず原料のトウモロコシを大学に送ってもらい、節の部分をカットして、苛性ソーダで 2 時間程煮た後でよく水洗し、歯車型ビーターで叩解してパルプ化しました。トウモロコシだけでは弱い紙になるため 30％の楮繊維を加えたものをあらかじめ用意しました。
当日は、小学校の校庭に漉き舟を二台セットして、用意したコットンとトウモロコシの原料を使って、ともに溜め漉きで紙を漉きました。

結果：
児童は、普通の白い紙よりもトウモロコシの特徴ある素材感に強い興味を示していました。
最初は、学生と一緒に漉きましたが、ひと通り体験すると、2 枚目からはひとりで漉くようになり、遊び感覚で紙漉きを楽しんでいました。
最後には、漉いた後の原料の撹拌も自発的に行うようになりました。

3. 徳島アワガミファクトリーと連携
2009 年に雁皮と楮原料の混合紙を試作したものを日本画研究室と版画研究室で制作に使い、その実践データをもとにさらに試作を重ねました。
12 月に最終の試作品が完成し、期待以上に良い結果を得ました。版画の場合には、紙の地合いやインク適正、紙色ともによいものとなりました。今後製品化することになり、常時手に入るとのことです。

4. 地域活動との連携
紙プロジェクトでは、紙素材に関する様々なデータと経験による知識および実践例を、他のプロジェクトや活動団体に提供することで、一層の広がりと充実を目指しています。
東京都台東区では地域にある古い民家を人が住むことで保存管理するプロジェクトを推進しています。若い人達が、それぞれの専門分野の知識と経験を生かし、ボランティアで参加しています。わたしたちはその活動に技術と機材を提供し、庭に生えている竹を原料として紙を漉き、社会から消えつつある活版印刷によってカードを作成し、技術を伝承するプロジェクトに協力しました。
その他にも、wataken(にこぷん) の活動や、神奈川県の湘南台で活動する地域 NPO 団体と連携した親子の紙漉きにも協力しています。

8_ コットンの用紙を漉く

9_ 脱水とプレス作業

10_ 和紙を漉く、楮繊維

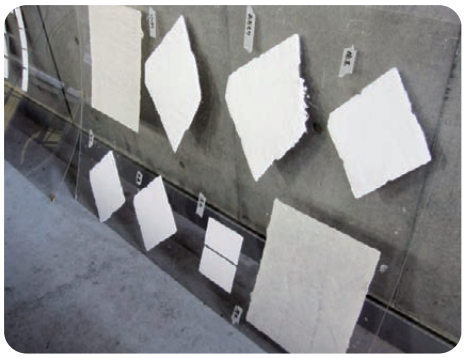
11_ 和紙を漉く

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

A_ 紙プロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

12_ アクリル板に貼って乾燥



13_ 紙を乾燥し、その後で滲み止めする

14_ 弥栄小学校、トウモロコシ紙漉体験

15_ ひとりで漉いてみる

16_ たくさん溜めて紙を厚く漉く

17_ 原料をかき混ぜる

18_ 漉いた紙を置く

19_ 紙の乾燥

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中
参加学生：美術学科日本画専攻他　240 人
担当教員：美術学科日本画専攻 橋本信　尾藤衡己
場所：本学相模原キャンパス 811 教室

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、日本画研究室で進められて来た岩絵具の研究成果を基礎に進められています。ベースには、研究室で独自に開発した造粒による岩絵具の制作・製造技術を使い完成（販売化）した、従来に比べ環境に付加のない岩絵具を教育普及用岩絵具があります。学生が、それらの岩絵具を制作に使うと同時にワークショップ用の岩絵具を製作し、さらにその岩絵具を、お絵かき教室・小学校に提供する形で日本画のワークショップが行われ成果をあげています。日本の伝統文化の一つとも言える日本画の普及に役立つことを目指しています。

その関連の試みとして、理科教育と美術との連携を模索した絵の具の原理を知ることを目的とした、近隣の高校との高大連携授業も行っています。

これらの成果は、オープンキャンパスや本学美術館で、「素材と環境展」を開催し、発表しました。

学生には、顔料・絵の具など自分たちの表現素材と環境とのかかわりについて知り深める場となっています。

■成果

実施したワークショップ、ミーティング、発表など具体的な内容

1. 夏のオープンキャンパス

日時：7 月 17 日、18 日

2. 教育 GP「素材と環境展」

日時：12 月 11 日～ 22 日

1_ ゾウのウンチ紙に描かれた作品

2_ 小学校のワークショップ準備

3_ 小学校のワークショップ風景

いづれも、素材論などで行った小石のモザイク、日本画ゼミなどで「ゾウのウンチ紙」に学生の作った岩絵具などで制作した作品、紙漉きプロジェクトと連携した試作の日本画の展示、ワークショップの写真の展示などを行いました。

3. 日本画ワークショップ
日時：12 月 7 日
場所：平塚市立城島小学校
日本画卒業生により日本画ワークショップを行いました。岩絵具はサービスラーニングの学生が製造し、提供しました。

4. 日本画ワークショップ
場所：絵画教室「アトリエミオズ」
日本画卒業生により日本画ワークショップを行いました。岩絵具はサービスラーニングの学生が製造し、提供しました。

5. 芸術と科学をテーマにした特別授業
日時：7 月 28 日～ 8 月 4 日
場所：神奈川県立青陵高等学校
芸術と科学をテーマに絵の具素材についての授業をおこないました。講師として卒業生が参加しました。

■今後について
日本画の特色ある材料として岩絵具がありますが、一般に高価なこともあり、義務教育段階での導入が難しい状況にあります。本学の開発した教育用岩絵具「エコ岩絵具 21」は、大手日本画画材店で販売されるようになっており実績を高めています。それらをワークショップで使用できるように絵の具をストックしていくこと、表現素材と環境とのかかわりについて知り深める場として、理科教育ともリンクした形でサービスラーニングを中心に進めて行く予定です。

4_ お絵かき教室のワークショップ

5_ 小石のモザイク（造形素材論）

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

6_ 芸術と科学

7_ 教育用岩絵具の製造

8_ 市販されている様子

9_ 顕微鏡で見る

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

C_ 素材ミュープロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 15 年 4 月〜継続中
参加学生：ファッション造形学科 約 30 名
担当教員：ファッション造形学科 小倉文子
場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの趣旨・目的

学生たちが日本の各地域に伝わる伝統繊維・染料について調査研究し、その知識と技術を学ぶことを目的に活動を行っています。また、伝統繊維・染料について、現地でのフィールドワークによる調査活動を通じて、その地域に暮らし、技術を伝承する人々との交流が生まれました。そして、日本文化に接する機会を得ることを目的とした重要な学びの機会となりました。本プロジェクトでは、新潟県に伝わる「アンギン」、岩手県の「ウール」、沖縄県の「芭蕉」などの糸素材を調査するとともに、それぞれ糸の原料から布へと紡ぐことを体験しました。一方、「バラ」「栗」「蓼藍」「こぶな草」などの草花や果物、「漢方の薬草」などから染料を抽出し、染料素材の探求をしながら、色見本帳の制作や「糸・布・衣」についての新たなデザインの提案を試みました。

■活動成果

「糸・布・衣」の原点を探る研究の中から、日本の風土、暮らしや生活が見えてきました。若い学生たちが体験や想像することができない一日の生活サイクルを知ることができた時、始めてアジアの片隅で、土とともに暮らし海に囲まれたこの島国のあり様が見えてくるようです。そういう環境の中で育まれた現地の人々の考え方や、産み出される伝統繊維・染料を再認識し、新しい価値の発見や気づきを獲得しました。 本来の国際化とは、自国の文化を知ることから始まります。自分たち存在ルーツを辿り、先人たちの知恵や創意工夫の根源を知ることは、クリエイティブな仕事をする上で大切な要素となります。デザインや、クリエイティブな仕事とは、日

1_ 苧麻の刈り取り

2_ 糸から編衣（アンギン）へ

3_ 十日町市博物館にて

常の暮らしの中から生まれるものであることに学生たちが気づく良い機会となりました。また、地域のお年寄りやこどもたちと触れ合うなかで、挨拶、御礼に表される日常生活での感謝、尊敬の思いなどを再認識し、「要望」や「依頼」などの、言葉と文字によるコミュニケーション、伝達の重要性についても理解する体験となりました。

【パフォーマンス & ファッションショー「バラバラのバラ」】
日時：平成 22 年 9 月 22 日（水）17:30 ～
場所：女子美術大学 13 号館テラス
バラから染料を抽出し、染色した布から衣服制作を行って、パフォーマンス＆ファッションショーを開催しました。音響などを含むすべての演出も学生が企画進行し、当日のヘアメイクは (株) 資生堂 SABFA の方々に協力を得るなど、完成度の高いパフォーマンス＆ファッションショーとなり好評を得ました。

4_ バラの摘み取り

5_ バラの染料で布を染色する

6_ バラの染料による美しい色

7_ バラの染料で染色した布を使って衣装制作

8_ ヘアメイクはプロフェッショナルが担当

9_「バラバラのバラ」パフォーマンス＆ファッションショー

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

D_ デザインミュープロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 20 年度〜継続中
参加学生：ファッション造形学科、デザイン学科 約 100 名
担当教員：ファッション造形学科 原田松野
場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクトの趣旨・目的
「デザインの価値観＜ちから＞―デザインを日々の生活に―」をテーマに掲げて、地球環境との共存を目指した日本のブランド力の発信を目指しています。素材と環境教育をキーワードにした美術教育における学生のデザイン力を、教育の立場から社会に伝える活動を行っています。学生たちが、社会、地域、企業、職人、作家、デザイナーとの接点を保ちながら、発表を通して社会や環境に優しい素材やデザインの魅力・価値を感じ、素材と環境に配慮あるデザインの将来性を担った活動を拡げていく事を目標にしています。

■活動成果
本プロジェクトの「環境と素材を考えたデザイン」によって学生は、社会に出る前に学びが必要だと考えられる企業と職人との関係を理解し、一般のユーザーが持つデザインの価値観を改めて考えることができました。具体的には下記の通りです。

学生が創り出すデザインを日本のブランド力として社会に発信できた。
環境に配慮したプロジェクトの一貫として、新しいライフスタイルを学外で提案する機会を得た。
デザインと素材のあり方を再認識し、社会や地域との関係や目的意識と役割を明確化する事ができた。
地域、企業、職人、作家、デザイナー、他大学との意見交換の場を共有でき、活動領域の拡大にも繋がった。
お互いの情報交換から知識や技術習得の学びを高められた。

1_ 那兒耶氏の公開講評会

2_ 作品展示風景

3_「hug cup」加藤 美香

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

D_ デザインミュープロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

【デザインの価値観＜ちから＞―デザインを日々の生活に―】
実施期間：平成 22 年 8 月 28 日 (土) ～ 9 月 2 日 (木)
ワークショップ：8 月 28 日 (土)
講評会：8 月 29 日 (日)
会場：ヨコハマ創造都市センター

参加学生約 100 名がこの活動に取組み、本学で生まれた素材や加工した材料を使った生活を楽しむデザイン作品や、企業、他大学との連携も含めた新しい試みのデザイン提案などを社会に向けて発信しました。第一線で活躍しているデザイナー、中小企業を招き学生作品講評会と企業紹介のプレゼンテーションを公開で行いました。
また、ディスカッションやワークショップなどでは、学生たちが素材と環境が社会に及ぼす関係を理解し、日々の生活の中にデザインがどんな役割を持っているのかを意識する重要な機会となりました。・縫製し、ゆかたを制作しました。また、帯もゆかたに合わせてデザインし、染色して完成することができました。
【バラ・プロジェクトへの参加】女子美術大学ファッション造形学科 3 年衣装クラスは教育 GP 素材ミュープロジェクトの活動として「バラでできたものたち展」に参加しました。

■今後 (22 年度) について
相模原キャンパス構内の一角に染料の原料として古くから用いられているタデアイとコブナグサを栽培し、自然との直接のかかわりから日本に継承されてきた伝統をたどり、繊維文化を検証します。素材から衣服へと仕立て上げていく過程、そこに息づいている人の手の技を体感的に学んでいくカリキュラムです。日本の伝統的な衣服制作が現代においてどのような価値を持ちうるのかという真摯な自問の機会と考えています。 また、この制作した作品をつなぎ合わせ、美術館や外部の施設で展示してゆきます。

4_「bag」山村 美紀

5_「名前を失ったファスナー達のバッグ」横田 菜月

6_「Bread Taker」廣瀬 瑶奈

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E1-1_ 注染プロジェクト　　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 18 年 4 月～継続中
参加学生：美術学科、デザイン学科・工芸学科、アート・デザイン表現学科
担当教員：デザイン・工芸学科 大澤美樹子　横山朋子
　　アート・デザイン表現学科 小林里江
　　外部講師　井関佳乃　内藤早苗
場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの概要

「注染手拭プロジェクト」では、日本の伝統染色技術である「注染」を学び、学生の感性による新鮮なデザインの手拭を製品化しています。

「注染手拭 B 反プロジェクト」では、僅かな織りキズや染めムラのためにB 反 (規格外) となった布を、女子美術大学 (以下女子美) の学生のデザイン力で新しい形に甦らせる製品開発を行っています。このプロジェクトは、貴重な職人の手仕事で染められた手拭や浴衣が B 反となり使う目的がなく処分されていくのは、肌触りの良い日本の布素材と伝統技術を考慮すると、非常にもったいないということから出発しています。

注染とは、主に浴衣や手拭を染める際に用いられる世界に類を見ない日本の伝統染色技術です。布と布の間に防染糊を型置きし、模様をつけ、上から染料液を注ぎ、下から吸収して染めるため、模様や色が表裏の区別無く染められる点が最大の特徴です。全ての染色工程において職人の手仕事が携わっているため、染め上がった製品は柔らかい柄の輪郭をもち、機械染では表現できない温かみのある仕上がりになります。また、模様や色に表裏の区別がない特徴を利用し、空間を仕切る飾り布や身につけるストールとしても応用可能です。布素材は、日本独自の「さらし」という木綿で、吸湿性に優れ、肌触りも良く、使うほどに柔らかく風合いも良くなるという利点があります。平成 22 年度は、そのプロジェクトの一環としてフランス・パリのアトリエ・ビスコンティを会場として「b・tan ぬぐい」の 2 回目の展覧会も開催しました。

1_ 型紙制作の仕上げ

2_ 柄をつける型置き

3_ 染め上がった手拭

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E1-1_ 注染プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

女子美は、この注染を教育に取り入れている唯一の美術大学です。伝統染色技術の一つである注染の職人仕事と美大生の斬新なセンスを活かし、注染の新たな展開を生み出すことを軸にこのプロジェクトを進め、多くの作品や製品を開発してきました。

□プロジェクトの趣旨・目的

日本の伝統染色法である注染についての学びを活かし、注染では難しい布素材を用いたり、美大生の自由で新鮮な発想による手拭デザイン柄の研究発表を行い、その内の数点を製品化しました。注染の特色を活かした自由なデザイン、用の目的や低コスト化にも考慮した、小さな布に完結されるデザイン表現に挑戦し、デザイン力を高めることに取り組んでいます。学生にとって、社会に通用するデザインを探求する実践的な機会となっています。

手拭は、日本独自の良質な木綿素材「さらし」を用い、「用と美」を兼ねた日本文化の特徴を持ち合わせています。

□成果

学生オリジナルの手拭デザイン 72 柄のうち 14 柄を製品化し、その成果を第一回目「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展で発表しました。

学生は手拭のデザインを考え、注染技法の実習から職人の技を知り、製品化までの流れを実体験しています。デザインを製品化するには技術を学び、その特徴を捉えたデザインを考える必要があることを学んでいます。また、消費者の立場やコスト面を考慮する視野など、普段の授業では学べない社会につながる実践的学習となっています。

本年度は「レトロモダン」をテーマに、本来の注染手拭の特徴である「藍色や一色物」によるレベルアップしたデザインを試みました。5 月に鑑賞した大正から昭和にかけての手拭の秀作から学んで、約 30 点のデザイン画が完成しており、本学美術館で開催した「素材と環境展」にて発表、投票選考を行いました。そのうち 4 点を製品化しました。

4_ 名入り手拭のポイントを学ぶ

【プロジェクト成果発表・展覧会】

・第一回目

「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展

実施期間：平成 22 年 4 月 2 日～ 4 月 15 日

会場：江戸伊勢型紙美術館・紀尾井アートギャラリー

・第二回目

「b・tan ぬぐい」パリ展

実施期間：平成 23 年 2 月 8 日～ 2 月 19 日

会場：Atelier Visconti　Paris,France

【注染手拭プロジェクト】

参加学生数：25 名（工芸 14 名、デザイン 4 名、日本画 5 名、ファッション造形 1 名、メディアアート 1 名）

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E1-2_ 注染プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

【注染 B 反手拭プロジェクト】
参加学生数：9 名 (工芸 6 名・デザイン 1 名・ファッション造形 2 名)

□プロジェクトの趣旨・目的
見学授業を行っている注染工場には、僅かな染や織キズのため、製品にならず処分されてしまう手拭があります。日本の伝統染色・注染と熟練職人の技術、素材の良さが集約されている作品だと考えるともったいないことです。
本プロジェクトは、これらを学生のデザイン力によって、新たな価値を蘇らせ、製品として発信していく取組です。学生は、僅かな染ムラなどで商品にならない B 反 (規格外品) を、技術・素材面から見直し、社会に通用するデザインとは何かを探求する試みを実践し、学生のデザイン力によって、新たに製品化、社会に発信しています。学生は、環境への意識を日々の生活の中で高め、廃棄予定の商品を製品として蘇らせる社会的責任や、デザインが社会に与える影響力についても学んでいます。

□成果
関東注染組合と 2 つの NPO と知的障害施設と多くの方々から協力を得て、その成果を第一回目の「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展にて発表しました。
さらに、デザイン作品 45 点中の 7 点を製品化しました。展覧発表は、B 反という廃棄予定される商品が、学生のデザイン力によって製品へと価値を高められたことを確認できる成果となりました。
第一回目の展覧会後、関西方面からも B 反手拭の提供を頂き、新たに 3 件の発注を受けるに至りました。2 件は、NPO 法人 GoodDay からの依頼です。環境庁の助成を得た廃棄処分になったヨットの帆を蘇らせる活動とコラボレーションし、バック制作やタンブラーデザイン制作を手掛けています。この他には、本学美術館から校章柄の B 反製品の商品開発の依頼を受

1_ 廃棄処分になったヨットの帆を洗う

2_ ヨットの帆を使ったバックの試作品

3_ B 反手拭と使用済みフイルムのタンブラー

けました。
本取組趣旨である「捨てられる物を新たなデザインで蘇らす」を維持するために新品の材料を用いることは極力避け、学科を越えたアイデアの協働により、互いの得意分野を活かした発想を持ち寄り、デザインの視野を広げました。特に平成 22 年度は、発注者の条件 (要望やコスト等) を考慮して製品を作り出すことに挑戦し、具体的な製品化における実社会の厳しさや困難を学ぶ良い体験をしました。

※写真撮影 image4：圷邦信写真事務所

4_ ミュージアムグッズ「ＪＡＭバッグ」

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E2-1_ 注染プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

参加学生：美術学科、デザイン・工芸学科、アート・デザイン表現学科
担当教員：デザイン・工芸学科 大澤美樹子　横山朋子
　　アート・デザイン表現学科 小林里江
　　外部講師　井関佳乃　内藤早苗

「ぬぐい―注染手拭と女子美の出逢い―」展
実施期間：平成 22 年 4 月 2 日～ 4 月 15 日
会場：江戸伊勢型紙美術館・紀尾井アートギャラリー

注染手拭プロジェクトと注染手拭 B 反プロジェクトの成果報告として合同展覧会を企画しました。
注染手拭プロジェクトでは、学生がデザインした数多くの手拭柄から専門家の厳しい視点と学生投票によって、上位 14 柄の手拭を選定し、商品化と展覧会への出展作品を決定しました。手拭に掛ける熨斗のデザインも学生がデザインを考えました。注染手拭 B 反プロジェクトでは、学生発案の計 45 点の試作品から、7 点を厳選し、商品化と展覧会への出展作品としました。素材を生かしたデザインになっているのかをテーマに、機能面や縫製工程についても専門家のアドバイスを参考に、みんなで作品の完成型を目指していきました。また、作品のパッケージや見せ方についても検討を進めていきました。
両プロジェクトの学生は、ブランド名とロゴマークを共に考え、展覧会の DM 制作、広報、会場構成まで役割分担をして展覧会開催に備え、学生が自主的に取り組んできた展覧会は、約 500 名の総来場者となり盛会に終了しました。学生は、製品化までの過程を知り、展覧会開催に至るすべての流れを経験し、社会に発表することの責任を体験することができました。展覧会場では積極的に作品説明を行う学生の姿もあり、自らが関わった展覧会への喜びと充実感に溢れていました。

※写真撮影 image 1 -9：圷邦信写真事務所

1_B 反：色柄の組み合わせが考えられた B 反製品

2_B 反：つながった一反で作るサウナガウン

3_B 反：ポケット付の輪ぬぐい

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E2-1_ 注染プロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

4_B 反：ホカロン、保冷剤も入れて一年中使える

5_ 手拭：厳選された学生デザイン
（差し分け、ぼかしの技術で反物での展示）

6_ 手拭：熨斗をかけて製品化した手拭

7_ 手拭：来場者に説明する学生

8_ ぬぐい展展示会風景

9_ 羽織り方を紹介する

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E2-2_ 注染プロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

「b・tan ぬぐい」パリ展
実施期間：平成 23 年 2 月 8 日（火）～ 2 月 19 日（土）
会場：Atelier Visconti　Paris,France

4 月の展覧会にご来場いただいた岩田安矢氏（日本のクラフト・工芸の展示会企画等のフリーコーディネーター）の薦めにより、パリ展の企画が始まりました。
日本の伝統染色技術「注染」と学生の斬新なデザイン力が活かされたプロジェクトが、海外でどのように受け入れられるのか、さらなる製品開発の余地を探ることができるのか、海外へ発信する第一歩として展覧会を開催しました。
学生は展示や来廊者の反応を直接味わうことは出来ませんでしたが、海外での展覧会に未知の魅力を感じ、その憧れが現実となっていく過程を目の当たりに体験しました。
現地パリでの来廊者は、昔ながらの手拭の用途や注染の技術に高い関心を寄せ、伝統の美に対する感覚、B 反製品に対するリサイクルのアイデア、そして物を無駄にせず大切に使う姿勢に共感を示していました。改めてこのプロジェクトの主旨が海外においても受け入れられていると感じ取ることができました。
今後も「日本伝統技術・自然素材・物を生かす精神」を国内へと海外へと分け隔てなく発信していけるよう活動を行っていきます。

※写真撮影 image 1 -9：圷邦信写真事務所

1_「ｂ・ｔａｎぬぐいパリ展」の展示遠景

2_「ｂ・ｔａｎぬぐいパリ展」の展示風景

3_ 素材感を味わう来廊の人

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

E2-2_ 注染プロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

4_ プロジェクトを説明するスタッフ

5_ 国際色にあふれた会場

6_「ちょこっと袋」を楽しむ

7_「ｂｔａｎ花」とオープニングパーティー

8_ 学生デザイン手拭とＢ反製品

9_ スタッフと関係者の記念写真

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

F_ 糸が結ぶセルビアと日本

http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 21 年 4 月～継続中
参加学生：ファッション造形学科、工芸学科、デザイン学科、美術学科
担当教員：ファッション造形学科 佐久間恭子　外部講師 新田その
場所：本学相模原キャンパス、その他
協力：特定非営利活動法人 ACC（危機の子どもたち・希望）、セルビア現地姉妹団体（Zdravo da ste）

■プロジェクトの概要

【主旨・目的】

人々がそれぞれの環境によってどのような文化や生活を営んでいるのか、国際的貢献とは何かについて考えること。また自分が出来る活動は何か、美術大学で学ぶ学生だからこそ出来ること（絵画・染織・編・刺繍・デザイン・・・）や世界共通の表現について考察し、発見へつなげるとともに国際的視野を広め行動するきっかけをつかむことを目的としています。

【活動内容】

美大生だからこそのアウトプットやクリエイティブな感性と、おばあさんたちの刺繍や編み物などの伝統的技術を活かした協働制作やワークショップの開催など、NPO 法人 ACC の協力のもと伝統文化やアートを通した交流を行っています。協働制作作品の展示発表・販売など、学生たちの熱意ある取り組みは、おばあさんたちが心の張りを取り戻し生きる喜びへとつながっています。一方学生たちは国際的視野を広め、人と人、心と心のつながりの大切さを感じるとともに、積極的に行動する力を養い、大きな力を蓄え、成果を上げています。

学生たちは、ACC における旧ユーゴスラビアの勉強会やセルビアのスタディツアーへの参加など、セルビアについての理解・ボランティアについて考えることから始め、ワークショップへも積極的に参加するなど、とて

1_ 女子美校庭の桜を背景に " 糸むす " メンバー

2_ セルビアから届いた丁寧な手仕事

3_10 月 女子美祭：展示販売風景

も熱心に活動しています。作品提案のデザイン画・サンプル制作も染織・編など授業での経験を活かして、自発的に工夫や試作を行い、難民であるおばあさん達との協働制作を通した心と心の交流にも、温かい手ごたえを感じています。女子美祭、JAM ロビーの展示発表、作品販売、ACC 代表の講演会などで活動内容を広く紹介、学生同士の信頼関係も強く役割分担もしっかり行ってまとめ上げた経験は、日常生活に対する新たな気づきや、国際的視野を広めるきっかけになっています。

■成果

1. 女子美祭　平成 22 年 10 月

平成 22 年 2 月に学生たちが ACC を通じてデザイン提案した作品は、おばあさん達の伝統を受け継いだ刺繍や編物、織物など、丁寧な手仕事と独特の配色でまとめられ、約束通り 10 月の女子美祭に間に合うよう送られてきました。

女子美祭ではファッション造形学科の展示スペースを借用して作品展示、チラシを用意、学内及び一般の皆さんへ配布・紹介するとともに作品販売も行いました。また「おばあさんの手」プログラムの一環として行われたワークショップの過程や学生のデザイン提案・ワークショップコラボレーションを紹介するタペを開催しました。展示内容と学生たちの説明はとてもわかりやすく、多くの皆さんの共感を得て、多くの方々に喜んで作品を購入していただき売上上々。残された課題としてはセーター・靴下など、日本人のサイズをおばあさん達に伝えること、デザイン提案にもう少し時間をかける、検討の余地があること、需要と供給のバランスがとれるとよい…など。制作したものが売れることは、おばあさん達の励みにもつながることとなるでしょう。

2. 教育 GP「素材と環境展」展示　平成 22 年 12 月 11 日～ 22 日

JAM(女子美術大学美術館) ロビーにおける教育 GP「素材と環境展」展示報告では、展示準備の段階から学生たち 9 人の強い絆と自発的な企画力、行動力には目を見張るものがありました。女子美祭での経験を踏まえ、さらに検討を重ねたうえで作品展示方法・タペの説明内容・写真を丁寧にわかりやすくまとめ上げました。期間中、JAM ロビーの展示作品の近くで行った作品販売では、美術館観覧の一般のお客様にも興味を持っていただき購入していただくことができました。作品自体の実用性、デザインと手仕事の魅力が伝わり、身につけてみたい・使ってみたい・プレゼントしたい気持ちが購入意欲に結びついており、おばあさん達と学生たちの手仕事とデザイン、感性のコラボレーションは自然に受け入れられているようです。

4_ 女子美祭：おばあさん達へのメッセージ

5_ 女子美祭：活動報告展示風景

6_12 月 教育 GP「素材と環境展」展示風景

7_「素材と環境展」おばあさん達の作品販売

実は、おばあさん達には作品を制作するとわずかですが工賃が支払われていますが、学生とのコラボレーション作品に関しては工賃の支払いを断られたそうです。心なしか普段制作している作品よりも丁寧で意欲的な仕事をしているようにも感じます。
おばあさん達が持っている伝統的技術や独特の配色・感覚を活かしたい、より素晴らしく展示したい、手に取ってもらいたい、多くの方達におばあさん達のことを伝えたい・・・そのような気持ちのパワーが伝わる展示となりました。

3. 講演会　平成 22 年 12 月 22 日
『人道支援におけるアートの役割～「糸が結ぶセルビアと日本」に寄せて』
「素材と環境展」最終日、ACC 代表 (心理支援の専門家) の講演会を実施しました。講演の中では、セルビアでの活動の中で偶然出会った難民のおばあさんたちの心理的・社会的サポートのために始まった「おばあさんの手」プログラムによる手仕事を通した交流の紹介がありました。また、難民の心が求めるものは何か、物資なのだろうか？心が癒え活力を取り戻すには長い時間がかかるのだから、人間としての尊厳を持って生きることや対等な関係性が「続く」ということが求められているのではないかというメッセージ、人道支援の目的は平和であり、さらにアート・文化の力はお金や物資ではなく、感性の力によるものであることなどを、丁寧にわかりやすくお話ししてくださいました。
セルビアの難民となったおばあさんたちにとって、「私たちも人の役に立てる」「心にかけている人たちがいる」ことの実感が生きがいにつながっているようです。高齢で難民になったスラボイカさんの葬儀で息子さんは最後に、「日本の皆さんと交流し、作品が日本で紹介されたことは、最晩年の母の幸福であり誇りだった。」と語られたそうです。
また、代表から、「糸が結ぶセルビアと日本」＝「糸むす」については、異文化の存在を知識ではなく、感性として認識し、未知のものへのときめきを持って活動のパワーとしている、とても純粋で熱心なグループだと感じてくださっているとの言葉を頂きました。
日ごろからワークショップや勉強会で、とても丁寧に、優しく接してくださっている ACC 代表初めメンバーたちの導きのおかげで、ACC との絆もしっかりしたものになりお互いに信頼できる存在となっています。このつながりも素晴らしいものです。

■今後について
学生たちはおばあさん達との協働作品制作という交流を通して心の繋がり

8_「素材と環境展」ACC 代表松永さん講演会

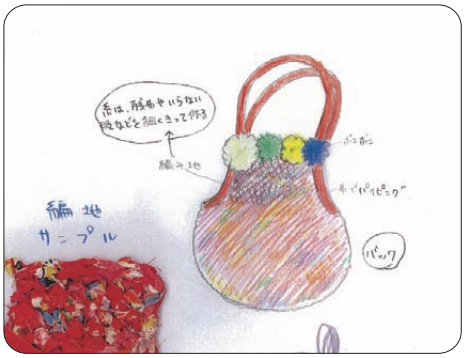
9_ ワークショップ：毛糸を投げて名前を呼び合う

10_ACC 事務所にてデザイン提案ミーティング

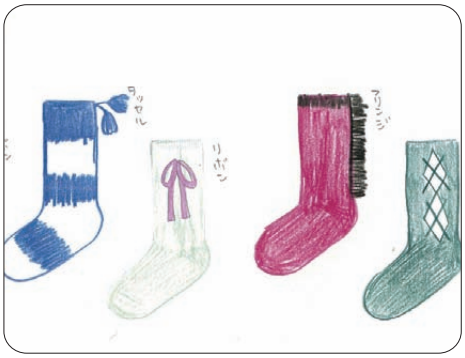
11_ ワークショップ：学生の作成した作品

を確認しながら、お互いの生きがいに向かって動き始めています。しかし、おばあさん達の心が癒え、活力を取り戻すには長い時間がかかると思われます。わたしたち女子美生が、知ること、行動することの大切さを自ら感じ、この活動を多くの人たちに伝えるためにも、後輩へと継続していくことが必要だと感じています。

教育 GP が終了した後も、新メンバーを募り 1 年目は同好会、2 年目からはサークルとして活動を行う予定です。平成 23 年度も女子美祭をはじめ、学外ギャラリーにおいて、協働作品展示・販売・ワークショップなどの活動報告を行うことを計画しています。



12_ デザイン提案 A


13_ デザイン提案 B

14_ セルビアから届いた作品の完成を喜ぶ

15_ セルビアから届いたワークショップ作品 A

16_ ワークショップ作品制作中の風景

17_ ワークショップ作品制作中の風景

18_ セルビアのみなさん

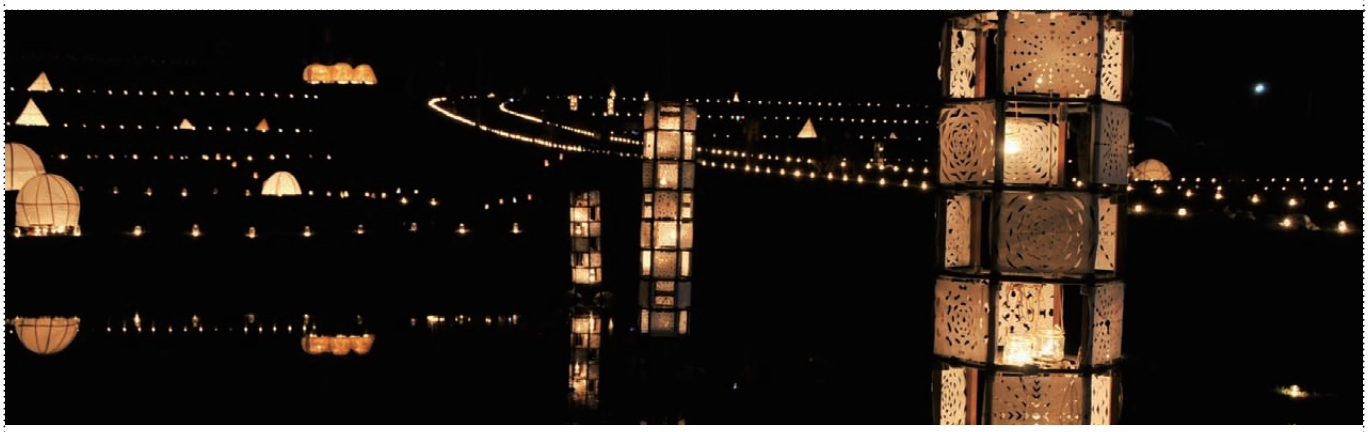
19_Ladies in front of ZDS office in Banja

20_Aleksinac 孤児院でのワークショップ

21_ ウールの糸とセルビアのおばあさん

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

G_ 環境論 +　http://www.joshibi.net/brand



実施期間：平成 21 年 9 月～継続中
参加学生数、「デザイナーズウィーク」チーム：
大学院 4 名、デザイン学科、メディアアート学科、立体アート学科他 17 名
「たんねのあかり」冊子制作プロジェクトチーム：デザイン学科 12 名
「リサイクル BOX」チーム：デザイン・工芸学科 3 名
担当教員：デザイン・工芸学科 横山勝樹　田村俊明　下田倫子
場所：本学相模原キャンパス、その他
【実施プロジェクト】
＊デザイナーズウィーク
＊「たんねのあかり」冊子制作プロジェクト
＊リサイクル BOX

■プロジェクトの概要
本プロジェクトは、全学学生が受講可能な科目である「環境論」の履修学生の中から、授業期間終了後も環境や素材に関連する自主活動を継続させたいと考える学生グループを選抜し、教育 GP として教育面、資金面で支援するものです。本年度は、下記の 3 つの環境活動の趣旨に賛同する本学学生たちが、実際にそれぞれの活動を行い、その活動を通して環境や素材について、自らが学んだ成果を冊子の制作を通してまとめました。また、その冊子を広く学内外で配布することで、他学生や社会人からの反響を受け止め、自らの環境・素材活動をさらに進展させました。
学生たちはそれぞれの活動においてミーティングを重ね、内容をより確かな形にしてゆくために、指導教官とも意見交換を行い、半年間活動を進めてきました。このような活動を通じて、冊子制作のための印刷発注や依頼調査など、他に任せられない責任感など、実社会において学内の授業では学べない重要な事項を短期間で経験し、身につけることができました。美術系学生にとっての良い機会が与えられ、同時に社会に通用する実績が得られたと思います。

1_DW：女子美ブース「The Earth Egg（地球の卵）

2_DW：王暢「Shall we dance?」（作家と作品）

3_DW：柴田菜緒・佐藤美樹「EGOBAG」

【デザイナーズウィーク】
期間：平成 22 年 10 月 29 日 (金) ～ 11 月 3 日 (水)
場所：明治神宮外苑　絵画館前球場内

4_DW：田口こずえ「BLUE BLOOD」プレゼンテーション

「TOKYO DESIGNERS WEEK」は、今年で 25 周年を迎えました。このイベントは 1000 を越える企業、学校、大使館、ショップやデザイナー等が参加し、最新のデザインを紹介するインターナショナルなデザインイベントです。毎年 8 万人程の来場者があるデザイン界では良く知られる大規模な催しでもあります。今年は巨大なテント 2 基とドームを設置し、開催されました。平成 22 年のテーマは「Blue」、「環境」X「デザイン」。地球温暖化や自然環境までを総称した「くらしの環境」への取り組みの発表となりました。WWF(世界自然保護基金) の協力もあり、非常に多くの来場がありました。女子美が参加した、イベントカテゴリーの一部である「学生作品展」のテーマは「Red List- 絶滅危惧種 -」。インテリア、プロダクト、グラフィック、ファッション、ファインアートを学ぶ学生たちの作品発表やコミュニケーション、次世代のクリエーターを育てる機会の場として開催され、国内外 32 校 35 グループの学校が参加し、約 400 点の作品が展示されました。
本学からは、大学院 (1 専攻)、芸術学部 (3 学科 5 専攻) の学生、10 グループ 10 作品 (21 名) が参加しました。女子美のブーステーマは「The Earth Egg(地球の卵)」。全ての命の源を「卵」として、36 本のビームで支えられた半ドーム状の形体で地球をイメージし、作品展示をおこないました。学生作品展の審査員により、女子美ブースは「AWARD- 学校賞」(全 7 校) を授与されました。また、個人賞候補 (全 32 作品) に、「王暢：Shall we dance?」(大学院環境造形専攻 1 年) と、「柴田菜緒・佐藤美樹：EGOBAG」(デザイン学科プロダクトデザイン 4 年) の 2 作品が選出され、公開講評会の壇上でプレゼンテーションした結果、王暢さんの作品が「GRAND AWARD- 最優秀作品賞」(1 点) を受賞しました。さらに、今年から企画された「STUDENT EXHIBITION AWARD PRESENTATION 2010」(各校 1 名選出による学生プレゼンテーション) では、女子美学生代表の「田口こずえ：BLUE BLOOD」(大学院環境造形専攻 1 年) が「TDA 理事長賞」を授与しました。3 賞受賞は大変な名誉でもあり、本学ブースの各作品は、国内外の多くの方々から賛辞を頂き、学生たちは大きな自信と誇りを得たと思います。
本学は、これまでも最優秀学校賞 (2009 年) や個人賞も受賞しています。
今後も、学生の作品成果発表として有意義なイベントになることを期待しています。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

G_ 環境論 +　http://www.joshibi.net/brand

【「たんねのあかり」冊子制作プロジェクト】

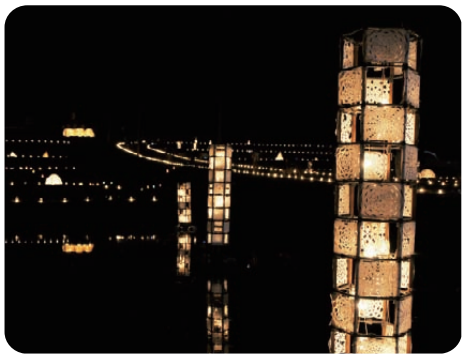
■プロジェクトの概要

「たんねのあかり」とは、本学教員と学生・卒業生と、新潟県柏崎市谷根（たんね）地域の住民との協働により、2009 年より取り組まれているアートイベントです。「あかり」と「そこにあるもの」をテーマとして、アートやデザインを通じて素材や環境について考え協働することで、実践的な学びを得ながら活動を展開しています。教育 GP においては、「たんねのあかり」のイベントに企画段階から実施まで参加した学生を中心に追加プロジェクトを立ち上げ、実施した一連のイベントについて活動報告の冊子化に取り組みました。単なる活動記録ではなく、イベントで伝えたかった思いや願い、感動や連帯感などを、アートやデザインの力で鮮明・忠実に伝えるツールを作ることを目指しました。

■成果と今後について

「たんねのあかり」活動報告の冊子化によって、学生は自ら取り組んだ活動を振り返り、整理・再構成する中で新たな気付きや課題解決の発想を得て、アートやデザインの意義や力を再認識するに至りました。また、冊子制作を経験することで、デザイン力や構成力を実践的に学び、身に付けることができました。制作した冊子は、学内においての配布のみに留まらず、「たんねのあかり」プロジェクトの連携先である谷根を中心にその周辺地域にも配布いたしました。アートやデザインを通じて思いを伝えるツールを活用した情報の発信を広く行い、学内外の方々や現地関係者・住民へのヒアリングをすることで、情報の伝達や受信について自ら評価する機会をもちました。

「たんねのあかり」における活動は、地域文化創造プロジェクトとして、本学と地域との協働によってこれからも継続的に進められます。教育 GP において、2010 年度は活動報告の冊子化に取り組みましたが、今後は一層の環境へのまなざしをもって活動の進展を試みていきます。



5_ たんね：「たんねのあかり 2010」イベントの様子

6_ たんね：地域素材である「竹」の特性と扱いを学ぶ

7_ たんね：籾殻をお借りして作品制作を行う学生たち…

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

G_ 環境論 +　http://www.joshibi.net/brand

【リサイクル BOX】

■プロジェクトの概要

美術大学では、課題などの制作活動において、使った材料にあまりが出ることがしばしばあります。これを違う学科・専攻の学生が他の課題でリサイクルすることで、資源のムダを削減をしようというのが、この活動の主旨です。

リサイクルを促進するためには、実際にどのような素材が、どれくらいの量集まるのか、またそれらが、実際に再利用されるのか、どのような素材にニーズがあるのかをあらかじめ予想して、回収と配布の方法、利用のルールを決めなければなりません。本年度は、それをシミュレートするための予行実験を行い、分析を行って次年度の本格的な活用の準備を行いました。

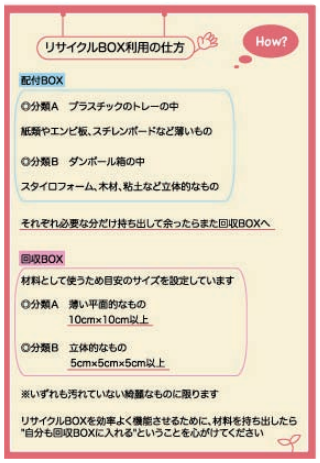
■成果と今後について

繰り返し模索しながらおこなった予行実験から得られた成果を基にして、「リサイクル BOX とは (目的)」「リサイクル BOX 利用の仕方 (方法)」リサイクル BOX マップ (設置場所) を記した「リサイクル BOX ガイド」という冊子を作成しました。(image-8、9)

ツールを活用して、新入生をはじめ学内への告知に力を入れてゆきます。

今後はリサイクルボックス (image-10) を学内の 4 箇所に設置して、本格的なリサイクル活動を実施する予定です。

8_BGR：冊子・「リサイクル BOX ガイド」より



9_BGR：冊子・「リサイクル BOX ガイド」より

10_BGR：学内に設置予定のリサイクルボックス

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H1_ にこぷん　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 21 年 4 月〜継続中
参加学生：芸術学部の各学科
担当教員：デザイン・工芸学科 横山勝樹
協働連携先：関連ページ、および本テキスト文末に記載
場所：相模原キャンパス、その他

【関連】
＊エココン・活動受賞歴
＊オーストリッチーズ
＊わたけん
＊ GM
＊ baishakhi

■プロジェクトの概要
オーストリッチーズ、GM、わたけん、baishakhi、4 つの団体から構成されている「にこぷん」は、「アート＆デザイン」の力でわたしたちの環境や地域、社会に対する意識を変えることを目指す活動団体です。
当初は別々に活動していた 4 団体が、素材や環境教育に関する情報共有、活動の活性化を目的として、平成 21 年春に「にこぷん」を結成しました。現在は 50 名あまりの学生が所属していますが、これまで 100 名以上の学生が活発に関わってきました。課外時間に学生がそれぞれのテーマに対して自発的、能動的に活動している点が本プロジェクトの特徴です。

■にこぷんの理念
1. 情報交換と社会への還元
環境問題と聞いて、みなさんは何を連想しますか？地球温暖化、大気汚染、森林伐採による影響など、漠然とした地球規模の問題を思い浮かべ、対策としてゴミの分別や節水・節電、資源の再利用などを考えるかもしれませ

1_ にこぷんのシンボルマーク

2_4 つの活動団体

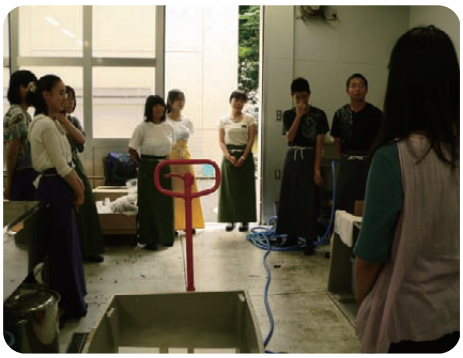
3_ オーストリッチーズ：気づきをまとめて発表する

ん。しかし、それらの行動を具体化するには、ひとりひとりが“環境”を大切に思う意識が必要です。自分本位の考えや無関心、義務感や誤った既成の概念などが問題解決を妨げることも往々にしてあることです。
このように、環境問題の解決は、問題意識そのものの捉えにくさからも、行動の具体化が難しいと考えています。
にこぷんはさまざまな活動指針を持った人々が、互いに意見し合い、考えを交換できる場であり、また学生自身が得た気づきを社会に具体的な行動を通して還元できることを目指しています。

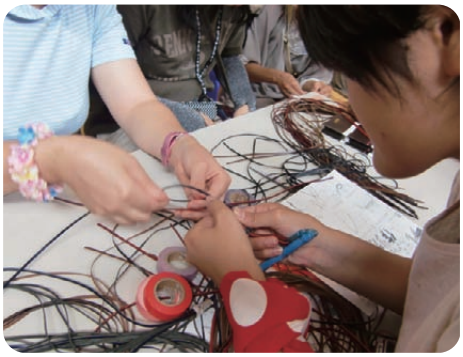
2. アート＆デザインの可能性
にこぷんは、美術を学ぶ学生の強みを活かし、環境に対する意識改革を「アート＆デザイン」の力で進めることを実践しています。「アート＆デザイン」には、わたしたちのメッセージや想いを、心に訴えてゆくことができると考えています。
“環境問題”を考えるという堅苦しいテーマにも、「アート＆デザイン」の力でわくわくとした気持ちで関わりを持つきっかけを導くことができます。わたしたちの特技でもあるワークショップ、裁縫、栽培、散策などのユニークな方法で“環境”に向かいあうことを勧めます。
一歩踏み出してもらえることで、ヒトとモノ、ヒトとヒトを結びつけ、「思いやり」の心が芽生えるのです。この「思いやり」の心で環境に向き合ってゆくことが、問題解決へ繋がると考えています。
また、「アート＆デザイン」は、世界共通、老若男女に通じる力を持っています。環境問題は世界で取組むべき問題です。ことばを必要とせず、世界に訴えかけることのができる唯一の手段「アート＆デザイン」の可能性こそが、にこぷんの可能性でもあると考えています。

■成果
平成 22 年度は、4 団体が協働して参加した「さがみはら環境まつり SUS コンテスト」で最優秀賞、「全国大学生環境活動コンテスト」では 3 位入賞・会場賞を受賞しました。エココン・受賞歴について、各団体の活動詳細は、関連ページよりご覧いただけます。

■協働連携先一覧
□相模原市立双葉小学校
サマースクールにてワークショップ実施
→オーストリッチーズ、GM
□相模原市立桜台小学校


4_wataken：紙漉に挑戦

5_GM：発見をまとめて発表する


6_baishakhi：WS・革のブレスレットをつくる

総合的な学習の時間にワークショップ実施
→オーストリッチーズ、GM
□神奈川県立相模原青陵高等学校
次世代育成のため企画者として受入れ
→にこぷん全 4 団体
□社会法人たんぽぽの家
障害児・者写真展での展示協力
革ひもブレスレット作成、うちわ作成ワークショップの実施
□神奈川県環境情報センター
さがみはら環境まつりへの参加
□ダチョウ牧場スマイルオーストリッチ
オーストリッチーズへの素材提供、牧場活性の支援
□江戸川区役所
ワークショップ実施場所の提供
→ GM
＊平成 23 年度より、すくすくスクールとのワークショップ実施予定

◎エココン・受賞報告
平成 22 年度のにこぷんは、学生の自主的活動である 4 団体が手を組み互いに学びつつ活動を進めました。
今年度も、様々なプログラム、コンテストなどに参加しました。「全国大学生環境活動コンテスト（通称エココン）」にも参加し、多くの環境活動をおこなっている他大学や組織の方々との交流もはかりました。
ここではエココンやコンテストなどの受賞、活動について報告します。

【さがみはら環境まつり】
日時：平成 22 年 6 月 27 日
場所：相模原市体育館　相模原環境情報センター
目的：活動の目的と意思を伝える・地域との交流
内容：
＊『SUS コンテスト』（注）にて優秀賞獲得！＊
相模原地域で活動する市民、事業者、大学、行政の協働により開催する「さがみはら環境まつり」のプログラムに参加しました。これは、環境にまつわる保全活動や教育実践の発表、展示の場を設けることで、活動団体の相互交流をはかると共に、一般市民のみなさんと一緒に環境問題を意識し、解決しようという意欲を高めるために企画されたものです。多数の環境活動団体に並んで、にこぷんも 4 団体の活動紹介展示を行いました。

1_ エココン・夜遅くまで出場準備のミーティング

2_ エココン・繰り返しアイデアを出し合う

3_ エココン・グループ選考のためのミーティング

4_ エココン・最終選考

より多くの方に楽しんでいただけるよう、スタンプラリーや「にこぷん」に関わった相模原をテーマとしたクイズを取り入れ、ブースデザインにもゲーム感覚を盛り込むなど工夫をしました。
また、『SUS コンテスト』に参加。にこぷんは、2010 年度活動であるオストリッチーズと GM の共同ワークショップ企画「種まきストーリープロジェクト」について 5 分間のプレゼンテーションを行い、相模原市内の小学生に、「環境への気づきの種をまく」というコンセプトを発表しました。その結果、みごと優秀賞を得ることができました。
プレゼンテーションで評価されたのは、小学校と大学が手をつなぎ合い、未来の担い手に気づきを与えるという希望に満ちた内容であるという点でした。また、発表や実施内容も、私たち美大生の得意分野である「アート＆デザイン」を介しているというユニークさも評価されました。
「さがみはら環境まつり」への参加へのきっかけは、エココン 2009 に参加した際に知り合った方からの紹介がきっかけでした。人脈の広がりが活動の広がりになっています。さらに、環境まつりへの参加によって、2011 年の相模原市立環境情報センターとの提携で新しいプロジェクトが進行する予定です。
(注)『SUS コンテスト』
「さがみはら環境まつり」企画のひとつとして、相模原・町田地域の明日を持続可能なものにするための環境学習プログラム提案コンテストです。SUS とは、Sustainability for Us in Sagamihara Contest の略。

【全国大学生環境活動コンテスト（エココン）】
日時：平成 22 年 12 月 26 日、27 日
場所：立正大学　大崎キャンパス
目的：平成 22 年度にこぷんの活動内容を振り返り、活動の意義をメンバー内で整理し、その活動成果を全国的に発表、環境活動をしている社会人また学生によって客観的に評価していただく。
内容：
＊ 3 位入賞／会場賞を獲得！＊
にこぷんとして『エココン』に出場するのは 2 度目です。2009 年度予選敗退（2008 年度オーストリッチーズが準グランプリ獲得）の反省を活かし、最優秀賞をとるべく全メンバーが一丸となった取り組みです。「にこぷんとしての 4 団体共通の思い、4 団体が集まっている意義と関わり」を中心とした発表内容としました。約 3 カ月間にわたって準備を進め、20 回以上におよぶ会議やプレゼンテーションの練習を積み重ねました。
その結果、3 位入賞／会場賞を獲得しました。『エココン』への出場を通し

5_ エココン・舞台で記念撮影

6_ エココン・3 位入賞＆会場賞をいただく

て、改めてにこぷんの活動理念を見つめ直し、「にこぷんとは何か」について語り合い、共有するできたことは大きな収穫でした。メンバーの結束やにこぷんの可能性、課題を再認識する契機ともなりました。

参考：全国大学生環境活動コンテスト 2010

【さがまちコンソーシアム】
日時：平成 22 年 10 月 16 日　13:00 ～ 18:30
場所：相模原女子大学　マーガレットホール
目的：パネルディスカッションという手法で、学生団体の現状、思いを地域へ情報発信するため。
参加者：小野由美子、藤田彩水、野原理恵、田中唯子、篠崎桂奈、島田涼子、生天目響子、吉田あさぎ
内容：
6 月 27 日に参加した「さがみはら環境まつり」にて、コンソーシアムの方に声をかけていただき、シンポジウム参加依頼を受けました。相模原・町田地域の大学 6 校 (麻布大学、桜美林大学、北里大学、相模女子大学、女子美術大学、玉川大学) の活動団体が共同でイベント企画を行いました。にこぷんは、企画立案の他に、イベント告知のチラシや団体紹介リーフレットの制作にも貢献しました。
シンポジウムは「学生が考える環境のカタチ」をテーマに団体代表 6 名がパネルディスカッションを行いました。
他大学と連携してプロジェクト進行を体験する良い機会となりました。他団体の考え方や文化に触れることで、改めてにこぷんを客観的に見つめ直す契機となりました。
また、チラシ・リーフレット制作やパワーポイント作成、展示レイアウトの企画を担うにあたって、「アート＆デザイン」の力がにこぷん＝美大生の、他にはない強みであることに改めて気づきました。

【全国ギャザリング 2010 ～ユースが変える世界の未来～】
日時：平成 22 年 8 月 26 日～ 8 月 30 日
場所：京都府立るり渓少年自然の家
対象：持続可能な社会に関心のある青年
主催：エコ・リーグ（全国青年環境連盟）
共催：YDP Japan Network

内容：

環境問題の枠を超えた『持続可能な社会の実現』のために、多種多様な分野・活動から 300 人の同世代が集まりました。お互いを刺激し合い、高めあいながら、共通の行動計画をつくり、社会を変える足がかりにしてゆくイベントです。
プログラム内の「ecoco ＋ plus」にて、にこぷんのプレゼンテーションを行い、参加者の投票により 1 位に選ばれました。

【全国ギャザリング 2010 ～ユースが変える世界の未来～】
日時：平成 23 年 2 月 25 日～ 2 月 27 日
場所：国立花青年自然の家
規模：100 人程度
主催：エコ・リーグ（全国青年環境連盟）
内容
このプログラム内の「ecoco ＋ plus」でも、にこぷんのプレゼンテーションを行い、参加者の投票により 1 位に選ばれました。

【バルーンリリース】
日時：平成 23 年 10 月 23 日（土）
場所：女子美術大学相模原校地
内容：
女子美祭 2 日目に恒例のバルーンリリースを行いました。
「LOVE ～地球への愛、人への愛～」をテーマに、同じ風船を同じ時間に飛ばすことで人との繋がりを感じ、多くの人に環境について考えてもらうことを目的にしています。風船の中には植物の種と手紙を入れ、すべて土に還る素材を使用しました。

7_ 女子美祭・バルーンリリース準備

8_ 女子美祭・バルーンリリース

9_ 女子美祭当日、バルーンリリースを実施

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H3_ オーストリッチーズ _ にこぷん　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 19 年〜継続中
参加学生：デザイン学科、工芸学科、美術学科他
担当教員：デザイン学科・工芸学科　横山勝樹
協働連携先：神奈川県立相模原青陵高等学校、相模原市立桜台小学校、相模原市立双葉小学校、スマイルオーストリッチーズ (ダチョウ牧場)
場所：本学相模原キャンパス　その他

■プロジェクトの概要

女子美術大学のキャンパスのある神奈川県相模原市は農業特区の認定を受けダチョウ産業を行っています。

オーストリッチーズは相模原市から「産業を地域にもっとひろめたい」という依頼があり、平成 19 年に結成しました。以降、学生が中心となったプロジェクトとして、活発な活動を行っています。

発足時は、副産物であるダチョウの卵の殻をいかに活用するのかについて考えることから始まりましたが、素材が持つ「命」というメッセージに気づき、活動の本質そのものを考えることへと変化してきました。

伝えたいこと＝ワークショップを通じて、いのちについて考える

理念＝思いやりと実行

思いやりとは､相手のことを考えること。わたしたちの活動には様々な「相手」がいます。それは､人であったり､ダチョウであったり､卵のカラでした。活動を通じてわたしたちは、牧場で大切に育てられたダチョウたちがと畜場へ送られる姿を見ました。そして「こどもたちはダチョウという珍しい鳥に興味を持つものの、牧場本来の機能を知ることができているのだろうか？」という疑問がわいてきました。平成 22 年度は「たべられるためのいのち」の存在を知る、触れるためのワークショップを開催しました。

1_ みんなで話し合って、野菜の種を決める

2_ 宿題の発表

3_ 授業風景：野菜が育つまで

■成果

【種まきストーリープロジェクト】

実施期間：総合学習の授業の一環

9 月～ 11 月計 6 回

9 月 3 日、9 月 10 日、10 月 1 日、10 月 29 日、11 月 6 日、11 月 19 日

場所：相模原市立桜台小学校

対象：桜台小学校 3 年生児童 約 40 名

内容：ダチョウ牧場の「牧場」から食事に関する「命」についての学習。

家での食事が何からできてどこから来ているのかを調査する。
野菜の種を卵の殻の植木鉢にまき、育てることで、食べ物を育てることの手間と時間を体験する。
発表会で自分たちの学んだことを伝える体験をする。
※種まきストーリープロジェクトとは、平成 20 年にワークショップを行った桜台小学校で、平成 21 年度に始まったプロジェクトです。
3 年生の総合学習の時間をいただいて、にこぷんが授業を担当しました。
こどもに将来のための「気づき」の種をまきたいという桜台小学校 3 年生担当教師の方々の願いから現在から未来への「種まきストーリープロジェクト」略して「種スト」という題をつけてスタートしました。
2 回目となる 2010 年度は GM とオーストリッチーズが授業を担当しました。GM は昨年も実施したグリーンマップを「地元を愛する海賊」という新たなテーマで、オストリッチーズは「食事」をテーマに行いました。

開催記録：

[第 1 回　7 月 9 日　「いただきます」について]

・ダチョウってどんな鳥？
・牧場ってどんなところ？
・食べ物は何からできてどこから来るの？
・宿題：今日のご飯について調べよう

[第 2 回　9 月 3 日　野菜が育つまで]

夏休み期間中の食事が何からできていてどこから来ているかを調査したものを発表する。

・前回の宿題発表
・農業のお話を聞く
・野菜の種を決める
・野菜について調べる

4_ 卵を使った植木鉢つくり

5_ 卵の殻が落ちないように。

6 _ 養鶏場見学：生産者の声を聞こう

7_ 発表会の練習：気づいたことを伝えよう。

[第 3 回　9 月 10 日　野菜を育てよう]
卵の殻を落として割らないようにと筆箱で囲むことを思いつく。
・野菜についての情報を共有する
・卵の殻を使った植木鉢作り

[第 4 回　10 月 1 日　生産者の話を聞こう]
現場をみて、現場で働く人の話を聞いた。
・養鶏場を見学する
・畑を見学する
・養鶏場の DVD を鑑賞する

[第 5 回　10 月 29 日　みんなに伝えよう]
保護者向け発表会に向け、班ごとに授業の中で気づいたことを「伝える」練習をした。

[第 6 回　11 月 6 日　みんなに伝えよう]
小学校の授業参観日のため、保護者が発表を見に来ていた。保護者の前で緊張しながらもこどもたちはハキハキと発表していた。
・授業参観での発表会

[第 7 回　11 月 19 日　まとめ]
・GM との合同報告会
・未来について話をしよう
・みんなで記念撮影

■結果
桜台小学校からお話をいただいた当初は、約 3 ヶ月にわたる授業の提案内容に、とても不安を覚えました。教員経験のない大学生が、しっかりとこどもたちに教えることができるのか非常にプレッシャーを感じました。そんなわたしたちに先生方は、わたしたちのやり方でこどもに教えて欲しいと言ってくださいました。その言葉のおかげで、こどもたちがこの授業で学んだことや気づいた事をそれ以降も意識していくことができるように願って、企画を創意工夫することができたと思います。
昨年度に実施した「卵の森プロジェクト」との大きな違いは 1 回限りの授業ではないこと。回数を重ねるごとにこどもたちに変化が生まれました。
例えば、夏休みに出した宿題の「食べ物調査」も、授業内での「調べ学習」もとても楽しんで行っていましたが、人前で話しをする事は苦手でした。

8_ 発表会の準備：どんな資料にしようかな。

9_ 授業参観での発表会：しっかり伝えます。

10_ 授業参観での発表会：少し緊張気味

11_ オーストリッチーズ登場

わたしたちがこどもが自然と話せるようにと心がけることで、当初、しりごみしていた子も、授業を重ねるごとに積極的に発表できるようになってゆきました。
わたしたちがこどもたちに伝えたかった「いのち」と「食事」についてその 100％は伝えることができなかったと感じています。それはわたしたちの伝え方が未熟であったからかもしれません。しかしこどもたち自身は、この授業からたくさんのことを感じ、学び取ったとわたしたちは思っています。約 3 ヶ月間で、わずか 7 回の授業でしたが、こどもたちが確かに成長したと実感できたからです。
これからも一層、いろんなことを学んで感じ取っていってほしい、その気づきがこどもたちの未来に花を咲かせることを願っています。

12_ 未来について話そう

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H4_ わたけん _ にこぷん

http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 21 年 4 月〜継続中
参加学生：工芸学科、デザイン・工芸学科
担当教員：デザイン・工芸学科 横山勝樹
協働連携先：神奈川県立相模原青陵高等学校
場所：本学相模原キャンパス　他

■プロジェクトの概要

日常生活にモノが溢れている現在、自分が食べている物や着ている物のルーツがとても分かりにくくなってきています。

この取組みは、とても身近にありながらもあまり知られていない「ワタ」という素材に目を向け、土作りから収穫、さらに糸から布になるまでを、『はぐくむいやし』をテーマに実践するプロジェクトです。

身近な素材を一から育て見つめ直す事で、新たな発見や気付きを得て、素材や環境、その現状に自然と興味を持てるようにする。そしてそれが私たちの視野を広げ、また新たな発見へと繋がって行く事を目指して活動をしています。

日本は国内で使われている綿の殆どをアメリカやインドなどの海外からの輸入にたよっています。

この輸入されている洋綿産地 (アメリカ、インド等) での農薬の大量使用は素材としての安全性や生産に関わる人々の健康の問題など懸念される材料が多くなっています。和棉は単に生産性の悪さのために社会から消えつつありますが、その良さや問題点を実体験を通して考察し、作品化することを本プロジェクトの目的としています。

今年度は、発足当初の『ワタを育てることで、素材や環境へ視野を広げ、新たな発見や気づきを得る』というヴィジョンを継承し、さらに本格的な活動を行いました。

1_ 収穫期を迎えたワタ

2_ 収穫したワタ

3_ 原料を攪拌

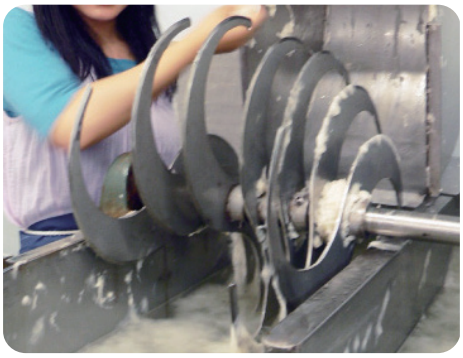
※育てているワタの種類
洋綿 - 和綿に比べて繊維が長くコットンボールも大きいのが特徴。
茶棉 - 茶色い天然有色棉で、着色の必要がないのが特徴。
和綿 - 江戸時代から作られている日本の棉で、繊維が短く、コットンボールも小さいのが特徴。

■成果
1. 肥料比較
昨年度の実験結果より、三種類の土 (アクアソイル・ダチョウの糞・鶏糞) からダチョウの糞一種類に絞りました。何の肥料も加えていない土と、ダチョウ糞を肥料として加えた土で畑を作り、ダチョウ糞が肥料として有効かどうかを調べています。
ダチョウ糞が肥料として有効であることがこの実験から分かれば、ダチョウ牧場の今後の商品開発へと繋げられるのではないかと考えています。

2. 他素材への探求
・7 月 31 日　紙プロジェクトとのコラボ：紙漉ワークショップ
素材を見つめる同じプロジェクトとの特性を重ね合わせ、新たな素材探求。視野を広げるため、紙漉きの技術の伝承と同時に裂き織りにも取り組みました。

・11 月 13 日　藍の育成・藍染め：和紙の藍染ワークショップ
昨年度の藍染体験に触発され、自ら藍を育て、その藍で自分たちで漉いた和紙を染めました。美しく藍色に染まった和紙は、第 2 回目のワークショップで育てた綿と共に織り込まれ、小さな布の作品にすることができました。

・11 月 27 日　糸紡ぎ・布織りワークショップ
綿繰りをして綿と種を分離させ、簡易スピンドルで綿を紡ぎ糸にしました。さらに簡易織り機で、糸を織り込み布を織りました。育ててきた「植物」であった棉が「布」となり、私たちの生活で使えるものとなりました。この営みを体感してもらえるワークショップとなりました。
また、自ら漉き、藍で染色した和紙を裂き、よってできた紙糸と、いったん役目を終えた布を裂いて生き返った糸（布片）を織り合わせ、一枚の布にする裂き織りも体験しました。
これらは、それぞれにいろいろな思いのこもった世界に一枚の布となりました。


4_ ワタから出来た紙漉原料

5_ 準備万端いよいよはじまりです

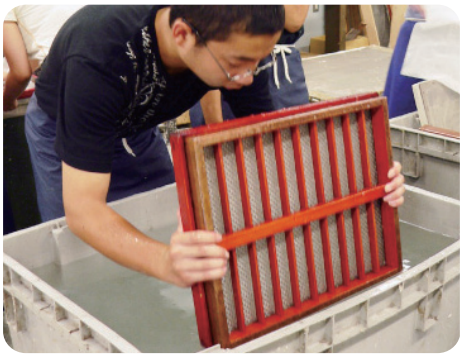
6_ 小さな枠で漉いてゆきます

7_ 丁寧に乾燥させます

※裂き織りについて
綿を育てていた北限、つまり日本で育成できるもっとも緯度の高い地域が栃木県であったために、東北に住む人たちにとって、布は大変貴重なものでした。「布を切るのは命を切るのと同じこと」という言葉が残っていることからも、そうした生活の中で、布は最後まで大切に扱われていたことが分かります。一度役目を終えた布も裂いて再び布片にし、また布としての命をつなげていく…そうして作られた布を裂き織りといいます。

3. その他
8 月 12 ～ 14 日　広島県尾道市向島へ研修旅行。立花テキスタイル研究所にて、今まで使用したことのない道具を使った糸紡ぎを体験しました。また帆布工場も見学しました。
9 月 12 日　神奈川県立相模原青陵高校文化祭にて活動の展示
10 月 22 ～ 24 日　女子美祭にて展示

■「ワタ」を育てることから見えたこと、学んだこと
自分で綿を一から育て、糸にし、布にするという一連の作業をすることで、綿が育つ環境や、自分たちを包んでいる身近な布が出来上がる環境を知ることができました。
また、綿生地のように身の回りにある当たり前の物が、見知らぬ場所で、沢山の工程を経て出来ているのだという事を実感することで、綿を育てるという活動だけでは出会えなかった人や場、つまり別の環境とさらに繋がることができました。
コットン紙の存在を知って「綿と紙」の間に繋がりが生まれたように、様々な物同士は別々の物ではなく、違う見方をすれば、いつかどこかで素材と素材、物と物とで繋がっていることを、綿を布にする作業一連から学びました。
実際に綿を育てることによって、わたしたちの心・意識の中で「いやしの感情」が育まれ、また素材と会話することにより、素材への発見や興味が自然とわいてきました。それは、別の素材への興味や生き物に対するいとしい気持ちが芽生えていく扉を開くきっかけともなりました。
便利になりすぎた現代社会の中では、自分自身の食べている食品や着ている衣類がどのようにして出来ているのか判りにくいからこそ、衣類の原料となるワタを自らが育て、加工する一連の作業によって、モノの大切さに気づきを得ることのできた貴重な体験となりました。


8_ 慣れてきたら少し大きめの枠で

9_ 溜め漉きにも挑戦しました

10_ 藍染め体験

11_ 藍染め体験

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H5_GM_ にこぷん　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 20 年〜継続中
参加学生：デザイン学科、メディアアート学科、美術学科他
担当教員：デザイン・工芸学科 横山勝樹
協働連携先：麻布大学、神奈川県立相模原青陵高等学校、相模原市立桜台小学校、相模原市立双葉小学校
場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクト概要

「世界とつながるネットワーク：グリーンマップ」

私たちは自分たちが生活する地域・環境をどのくらい、知っているでしょうか。グリーンマップは、暮らしている街や地域を、グローバルアイコンと呼ばれる建物・植物・感情などをシンボル化した世界共通のマークを使って地図にまとめることで再発見し、その発見を地域の人に発表してゆく活動です。現在この活動は、世界の 50 カ国 450 以上の都市に広がっています。

「大学生 + アート + グリーンマップ = GM」

アートを学ぶ私たちは、いかに「人の心を動かす」ことができるかについて常に留意しています。グリーンマップには、人と人との会話、街の散策によって地域や身近な環境に触れること、地図の作成や発表を通して気持ちを共有することなど、さまざまな要素を持った総合的なコミュニケーションの可能性があると考えています。

普段何気なく歩いている道も、いつもよりじっくりと時間をかけ“五感”を使って捉え直してみることで、地域に対して新らしい“感情”を育み、“知る”ことが出来ます。やがて発見したものに対する愛着は、「思う」気持ちに繋がっていきます。日常のようで非日常的なその発見を、きっと誰かに「伝える」ことになるでしょう。

グリーンマップを通じてこの「知る・思う・伝える」というサイクルが生まれ、他者や自然を思いやる気持ちの大切さに気づくことや自発的な活動にも繋がってゆくのです。

1_ 双葉台小学校ワークショップ・散策する

2_ 散策ルートはこどもたちが決める

3_ 大学生ファシリテーターと一緒に散策する

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H5_GM_ にこぷん

http://www.joshibi.net/brand

一般的にエコというと、CO2、ごみ削減などの活動が多いものですが、GM は環境・人に対する気持ちをつくりだす心を育む“エコ”として、コミュニティーの輪を“デザイン”するというアートの視線から新たな風を巻き起こしています。また、日本各地域から集まったメンバーが一緒に活動することで、多角的に地域を見直すチャンスを得ています。GM は、「歩く」という手軽なアクションから地域を見直し、人や自然と触れ合うということにプラスし、“ガムシャラ”な日々の生活の中からも得られる気づきをプラスすることで毎日を楽しく、物事に一途に取り組むことをモットーに日々活動しています。

平成 22 年度は「女子美周辺地域の小学校・高校・大学とつながること」を目標に掲げて活動しました。現在主に 4 校（双葉小学校、桜台小学校、県立相模原青陵高等校、麻布大学）と連携しています。

＊ GM 流　ワークショップの流れ

1. 散策

大学生ファシリテーターと小学生が一緒に散策します。グループ内でこどもたちの役割（道を決める係・発見物を調べる係・時間を知らせる係 etc）を決め、自発的な活動を促し、“五感”を使うことを意識させたり、クイズ・自己紹介などをとりいれ、こどもたちの気づきを導く雰囲気を作るよう心がけます。

↓

2. 発見

発見したものに感情アイコンを当てはめ、記録します。こどもたち同士の何気ない会話も大切な発見です。発見には色々な種類があり、物・感情・においなど知覚的発見も当てはまります。

↓

3. 地図づくり

発見したものをグループでひとつの地図にします。こどもたちの自主性・感性を尊重し、みずから描く・切る・張る・折る・作ることが出来る素材（折り紙・散策写真・スパンコールなど）を多く用意しておき、飽きさせない工夫を凝らします。

↓

4. 共有

発見を自分達だけのものにするだけでなく、多くの人に伝えられることを大切にしています。作成した地図や発見の紹介に加えて、実際の発見物を作ったり、オリジナルの演劇を取り込むなど、発表に工夫を行えるよう勧めます。

4_ 双葉台小学校ワークショップ・地図をつくる

5_ グループでひとつの地図にする

6_ 多くのひとに伝えることを大切に、工夫する

■成果

今年度は、2 つのワークショップを実施しました。

活動を通じて携わった本学学生たちも、ファシリテーション能力がつく、立場・発見を意識できるようになる、パソコンスキルなど技術力の向上、地球や人に対する愛情が増す、日常生活で気づきが増える、積極的になって行動力もアップするなど、多くの点で成長を実感することができ、大変実りのある体験となりました。

1. 相模原市立双葉小学校ワークショップ

実施日：サマースクール（※）の 2 日間　7 月 26 日、28 日

参加者：双葉小学校児童 13 名、本学生 16 名、高校生 5 名、他大生 1 名

ストーリー：トレージャーハンターグリーンマップ

活動フィールド：双葉小学校周辺 (通学路・身近な場所)

※サマースクール＝地域の方を講師として招く野外授業

小学 3 年生～ 5 年生・高校生・大学生で双葉小学校周辺 (児童の通学路、身近な場所等) を舞台に、トレジャーハンターになって散策しました。「未来を発見！君と双葉と地球と･･･」がテーマ。散策を通して地域の現状を知り、そこから想う未来を描くことにより、“ 理想の地域をつくりたいと思う心を育てる ” ということを目指しました。

【1 日目】散策

キーポイント (チェックポイント) に高校生が考えた “ 五感クイズ ” を取り入れて、こどもたちと五感を使って地域を感じました。

【2 日目】地図の作成

折り紙・絵の具・ペン・写真・拾ってきたもの･･･ いろいろな素材を使ってグループで一緒に 1 枚の地図をつくることによって、お互いに心の通うつながりを持つことができました。最後には、小学生自身が散策の中で印象に残った発見 (= 心の宝) の未来を考え、絵や文字で表現する未来日記をつくりました。 アフターケアとして、参加した小学生に思い出をまとめた「未来の本」をプレゼントし、またワークショップの内容を全校生徒に向けて「新聞」としてまとめました。

今年度のストーリーは、平成 21 年度の反省から個人発見のワークショップを行うよりもグループ発見の方が GM の目的に合っていると考え、グループで何かを探せるようにと企画立案しました。

トレジャーハンター (宝探し・冒険) での発見を大切にする＝ 発見は宝であることを強調し、宝物を自分達の手で守っていくこと、普段とはちがう

場所に行ってみることをプチ冒険にみたて、どんな小さな発見も等しく大切であることを小学生に伝えやすくしています。

2. 相模原市立桜台小学校ワークショップ
実施期間：総合学習の授業の一環
9 月～ 11 月計 6 回
9 月 3 日、9 月 10 日、10 月 1 日、10 月 29 日、11 月 6 日、11 月 19 日
参加者：桜台小学校児童約 40 名、本学生 28 名
ストーリー：海賊版グリーンマップ
活動フィールド：相模原公園・麻溝公園・桜台小学校周辺

夏から秋にかけて、小学校 3 年生の総合的な学習の時間の一部をいただく機会をいただき、長期にわたったワークショップを行いました。先生方と目的をしっかり共有できるよう、会議を重ねた結果、小学生の心の畑を耕しさまざまな“気づき”の種をまくことで、身の回りにあるものの大切さを感じられることを目指す「種まきストーリー」が産まれました。「地域を入り口に私と○○を意識できるようになる」ことを種まきストーリーの目標としてを企画を開始。特に「身の回りにあるものの大切さを感じるようになること」を GM の目標にしました。
【1 日目】散策
相模原・麻溝公園を舞台に双葉小学校ワークショップ同様、散策ルートをこどもたちに決めてもらうなど自主性を尊重しつつ、キーポイント (チェックポイント) には、“五感クイズ”、“相模原クイズ”、“でいだらぼっち伝説（＊注）の紙芝居”を盛り込みました。フィールドの広さを生かして 9 グループが思い思いの道を進み、その結果、地図は各グループの個性あふれるものになりました。
【2 日目】散策
桜台小学校周辺をメインに小学生にとってより身近な地域を“五感”を使って感じ取るよう呼びかけ、一緒に歩きました。
今回は開催日の間が長いため、大切な発見や気持ちを忘れてしまわないように、こどもたちの家周辺の地図づくりや、目・鼻・口・手・耳の使用度をグラフに記録する五感グラフを用いて散策を振り返るプリントなどを宿題としました。 最後のまとめとしては、授業参観という形で、これまでの散策や発見をまとめた発表会を行いました。
こどもたちは、発表のためにお気に入りの発見をグループで決め、劇や発見物を作ったり、発見から物語をつくり、それらの物語や劇、インパクトのある道具、五感を取り入れた発表まで、すべてを自らの手で試行錯誤す

ることで、発見したものの魅力を大いに表現することができました。わたしたちはこの発表から“地元を愛する海賊になる”“自分の身の回りの大切なもの・環境を守る”という種がしっかりこどもたちに根付いていることを実感することができました。
＊注　でいだらぼっち伝説：「でいだらぼっち」のお話は神奈川県をはじめ、関東など富士山をのぞむ地域に、広く伝えられている「巨人伝説」

■今後について
つながり・・・広がる“輪”「わたしたちのかんがえるエコ」
当たり前のことがどんなに大切でかけがえのないものなのか、わたしたちは意識できているでしょうか。今ある自然や環境を保っていくには、その尊さを感じ問題意識を持つことが重要になってくると思います。GM の活動はそのための“きっかけ”です。 人と接することや、自然を知ることは人々が忘れかけている「人や自然への思いやり」を思い出すことでもあります。それはお互いの心に触れる・または触れようとする行いは、きっと毎日をより良く前進させていくでしょう。誰かの思いがつながって、やがて輪になり、広がっていく。GM は思いやる心をはぐくむ活動でありたいと願っています。
江戸川ワークショップなど既に GM を卒業した学生の働きかけによって新たな活動が増えています。今後 GM を卒業した人によってさらに広まっていき、それを GM の活動に戻すことでさらなる可能性を広げていきたいと考えています。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

H6_baishaki_ にこぷん　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 21 年 9 月～継続中
参加学生：メディアアート学科、絵画学科、美術学科他
担当教員：デザイン・工芸学科 横山勝樹
協働連携先：神奈川県立相模原青陵高等学校
場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの概要

baishakhi(以下ボイシャキ) はバングラデシュから来た留学生との出会いから発足しました。南北問題により生じた経済格差は現在も続き、同国は最も貧しい国の一つとして、人々は日々苦しい生活を虐げられています。本プロジェクトの取組が同国の諸問題の解決に少しでも貢献できるよう、学生のデザイン力を活かして､特産品である「革」製品の開発・提案を行っています。

平成 21 年度に、教養科目である「環境論」を受講していた学生たちがその発展的授業「環境論 +」として始めましたが、今年度は「にこぷん」に加わり、活動を継続しています。

まず「素材」を入り口にし、そこから環境問題に興味をもってもらう･･･革という素材への興味と好感から、その素材の原産国である国、バングラデシュについても知ってもらう。このように少しずつ、興味→好感→知る→使う→広がる、の順に広がってゆくことを狙いとしています。

「環境論」の授業から、人と人との経済的格差を解消できなければ、環境問題についての本当の解決は無いと考えました。環境問題の大元は南北問題にあると考えています。南北問題の北側とは欧米など北半球の先進国を指し、南側とは南半球に多く位置する植民地化されてきた国々を指しています。発展途上国では森林伐採や、未発達な工業による環境汚染等、悪循環が続いています。バングラデシュの現状は、人口が爆発的に増え、国民の約 6 割が農業に従事しているものの、失業率は約 4 割を越えており、都市にはヒトがあふれています。また、働き手は殆ど男性です。女性の社会

1_ 革をみたてる

2_ ミーティングにも熱がはいる

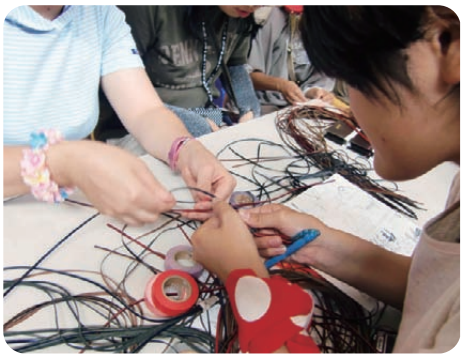
3_ 革で試作する

進出が増加していますが、まだわずかだといわれています。ボイシャキはバングラデシュからの留学生にその現状を聞き、解決に向けて出来ることは何かを考えました。
多くの人にバングラデシュや南北問題について伝えるべく、本プロジェクトではバングラデシュの特産である牛の革を使って平等な立場での商品開発、販売を目指すことにしました。女子美側でデザインを行い、バングラデシュの職人が商品の製造を行います。そうする事によって見込み生産などの無理な計画に頼らずに仕事ができ、平等な立場で商品開発を進める事が出来るはずだと考えました。いまだ経済的に非常に弱い立場にある女性に手に職をつけて、自立してもらいたい。女性だけではなく、「支援依存国」としてのバングラデシュの自立を少しでも手助けしていきたい。こうして格差を無くすための仕事を提供すること、革小物のデザインの質の向上を目標に、ボイシャキはスタートしました。

■成果
様々な調査活動、バングラデシュ支援活動を行っている NGO の方にお話を伺っていく段階で、目標の実現が非常に難しいことだとわかりました。目指す支援のあり方を確立するまでには、想像以上に長期間を要し、組織化も含めて様々な検討事項があることが明らかになりました。そこで、気負わず学生たちがはじめられることから改めて考えました。まず「革への興味」を深めること、革という素材の研究をすることから始めました。

【ワークショップ：革のブレスレットをつくる】
平成 22 年度は会場で、ボイシャキの活動報告展示を行うと同時に、革紐でブレスレットを作るワークショップを 2 回行いました。
「革」という素材に触れる機会を用意しながら、環境問題に興味をもってもらうことを目的にしました。
参加者の中にはこのワークショップで初めて「革」について意識したという人や、ブレスレットを作りながら南北問題についての議論もあり、少なからず手応えを感じました。しかし南北問題についてはきちんと理解してもらうのが難しく、ワークショップでのレクチャー内容に工夫の必要性がありそうです。
またデザイン面にも課題が残りました。皮の特性を生かした製品を作ることの意義を考え直す機会となりました。
１．１回目：第 35 回相模原市相模原地区障害児・者作品写真展
期間：平成 22 年 8 月 20 日～ 22 日
場所：ジャスコ相模原店 1F パブリックスペース

4_ ワークショップ展示風景


5_ 青陵高校文化祭ワークショップ

6_ ワークショップ：ブレスレットをつくる

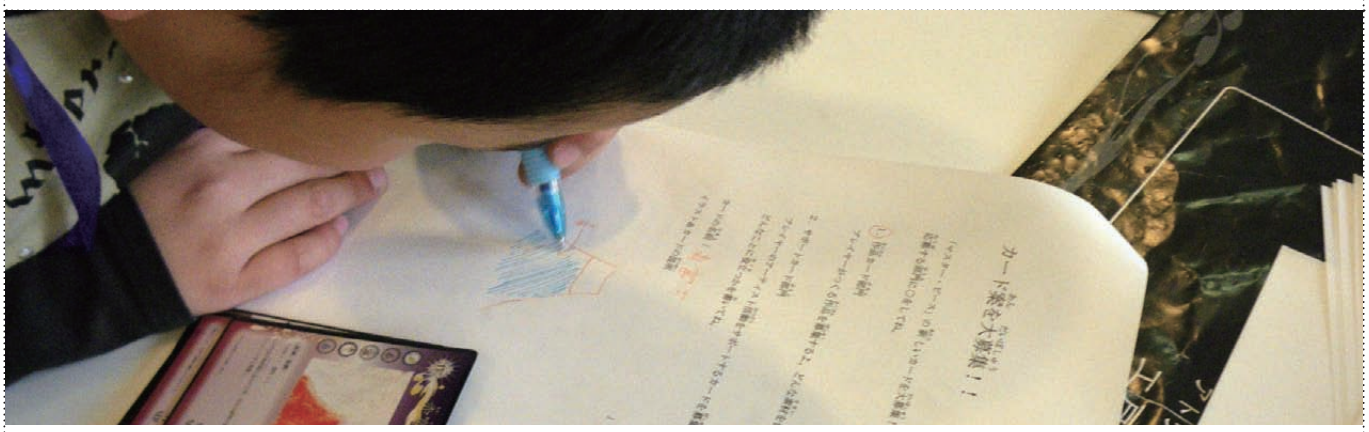
主催：相模原地区障害児・者作品写真展実行委員会
協力：にこぷん
２．2 回目：神奈川県立相模原青陵高校文化祭
日程：平成 22 年 9 月 12 日
場所：県立相模原青陵高校

■今後について
私達は今、大量に消費することに慣れてしまっていますが、自分のライフスタイルを見直し、手にしている商品の生産プロセスを理解した上で、本当に価値のあるものとは何か考えるべきでしょう。例えばフェアトレード製品 (公平貿易：弱い立場の人々の労働を不当な価格によって取引したものではない商品) を広く紹介していきたいと考えています。フェアトレードの視点から革にまつわる問題を考え、意識改革につながるきっかけが掴めるかもしれません。この意識改革が大きな動きとなり日本全体の意識を変えられるよう働きかけてゆきたいと考えています。
教育 GP の支援が無くなった後も活動を継続するためには、学生が作った物を販売し、活動資金を得ることも必要となってきます。
わたしたちが南北問題について知ることによって行動したように、「知る」ことで少しずつ意識改革ができると信じて、その輪を広げてゆけることを目指しています。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

I_ 素材環境教育プロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

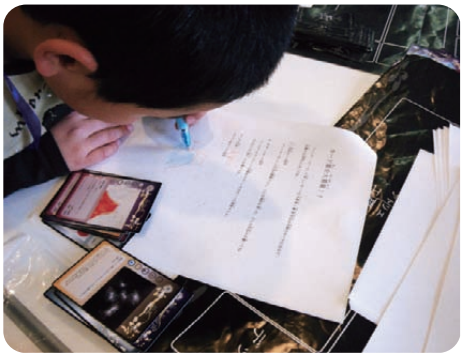


実施期間：平成 20 年度〜継続中
参加学生数：芸術学科他約 10 名　近隣小学校の児童有志
担当教員：美術研究科 坂田勝亮
場所：相模原キャンパス 1 号館 5 階を中心に、必要に応じて随所

■プロジェクトの趣旨・目的
素材と環境の関係を美術を通して教える、という若い人材を育成するため、美術教育のツールとしてこどもたちに人気のあるトレーディングカードゲームを開発し、その効果を測定してきました。
開発の目的として、下記 3 点を主な項目としています。
素材と環境の関係を、美術を通してわかりやすく伝える。
こどもたちが興味を持つ面白さをもつ。
従来、男子を念頭においたコンセプトが主流の、トレーディングカードを女子でも楽しめる内容にする。

■成果
本取組は、美術作品の素材が環境から得られるものであり、環境の維持・管理が作品制作と重要な関連を持つことを、カードゲームを通して小学生に教育することが効果的であるか否かを検討するものです。学生たちはカードゲームを開発するために同様事例の活動を参考にし、また環境と素材に関する知識を勉強しました。開発はこれらの勉強の成果をもとに行われ、ルール、デザイン、教育効果などいくつかの班に分かれて、平成 21 年度 1 年間をかけ開発を進めました。
完成したカードゲームは地域の小学校の協力のもと、ワークショップを通して効果が測定され、これらの結果をもとに、平成 22 年度には改訂版を追加しました。また、これらの教材を継続的に用いることで、小学生たちは美術教育を通して素材と環境の理解を深めることができるということが明らかとなりました。この取組を通して、本学の学生たちは美術教育の広

1_ いよいよ対戦開始



2_ こんなカード・ルールも希望

3_ フィールド

がりと重要性を再認識し、併せてデザインした作品が小学生たちの感動と興味を引き起こすことの重要さを学びました。

【第 4 回　女子美陶コース 3 年次の合同講評】
日時：平成 21 年 7 月 21 日（火）　13：00 ～ 17：00
場所：女子美術大学、工芸学科陶コース実習室
本学 3 年次の前期講評会に新磯高校が参加しました。3 年次学生の 4 月～ 7 月までの進展状況を一人ずつ提示し、それに対しての意見の交換を行いました。本学の 3 年生は、自分の制作テーマや制作プロセス、作品の変遷などについて作品をもとに高校生に説明しました。説明後、高校生の質疑などにより、自分の説明が的確であったかを確認しました。高校生にとっては、美術を専門に学ぶという具体的な状況に触れて、高校での美術活動についてもう一度考えてみる機会となりました。出席者全員にそれぞれの学生作品についての簡単なレポートを書いてもらい、専門外の人たちを含めたかたちで、作品の良い点と問題点を指摘してもらいました。

【第 5 回　女子美陶コース 4 年生によるレクチャー】
日時：平成 21 年 9 月 1 日（火）　13：10 ～ 16：30
場所：神奈川県立新磯高等学校　陶芸実習室
本学 4 年次学生によるスライドレクチャー。学生の高校時代から現在までの作品をスライドとファイルで見せ、それぞれの時点での制作について説明しました。その後、作品（実物）を見せ、質問に答えました。自分の発想でテーマを決めて、技法を工夫しながら作品を完成させるという、制作プロセスを伝えました。

【第 6 回　女子美祭作品鑑賞】
日時：平成 21 年 10 月 24 日（土）　10：00 ～ 12：30
場所：女子美術大学　相模原校舎
新磯高校の先生方と生徒が女子美祭を見学しました。女子美祭では授業で制作した作品が学年別に展示されているので、本学の美術教育を作品を通して理解していただきました。特に工芸学科の展示場では本学学生が解説をし、高校生が制作者とじかに触れ合う機会を作りました。

高校生と大学生が陶芸を通してコミュニケーションをとり、美術を学ぶことについて自発的に考えを深めていくようになりました。高校生にとっては、大学生の作品と考え方を本人から生で伝えられることによって、数年先の自分の未来を実感を持って感じ取り、考える良いきっかけになったと思います。大学生にとっては、自らの考えをわかりやすく他者に伝えると

4_ よし！やったぁ～

5_ 資源が制作を支える

6_ 次の対戦相手

7_ 女子にも馴染みやすい

いうことについて、実践的に学べる良い機会となりました。

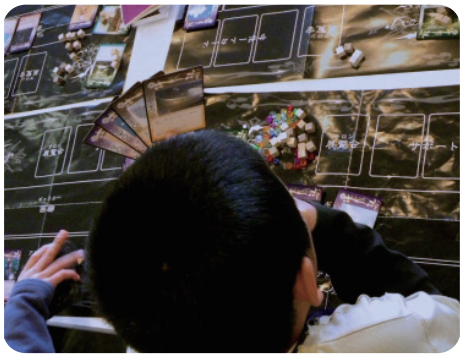
■今後 (22 年度) について

今後の課題としては、1. 参加人数をふやす。2. 共同制作の可能性を探る。3. 高校生がプレゼンテーションをする。など、検討していこうと思います。また、今年度にあまり話し合えなかった設備面については、来年度に検討していきたいと考えています。

■付記

11 月から 3 月までの期間に活動が計画されなかったのは、新磯高校がこの時期に移転準備で忙しくなるためです。新磯高校は、来年度から相武台高校と合併し、相模原青陵高校という新しい高校になります。その際校地が現在の相武台高校になるため、陶芸窯などの大掛かりな設備移転をしなくてはならないので、11 月以降の活動は行わないことになりました。

尚、合併後も引き続き協力関係は継続し、来年度からは、相模原青陵高校との陶芸コラボレーションを行うことになりました。



8_ 相手の可能性は…

9_ 男女、各学年誰とでも

10_ 隣の対戦も気になる

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

J_ 青陵高校陶芸コース・コラボレーション

http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 20 年 11 月〜平成 22 年 10 月
参加学生：工芸学科、神奈川県立新磯高校、相模原青陵高校
担当教員：デザイン・工芸学科 吉田潤一郎
場所：女子美術大学、神奈川県立新磯高校、県立相模原青陵高校

■プロジェクトの概要
本プロジェクトは、陶芸を通して大学教育と高等学校教育の連携を深め、地域の教育環境に貢献しようとするものです。高校における授業への協力などを通じ、高校生と大学生の交流を図り、お互いの発展的関係を目指してきました。

■平成 22 年度活動
この活動も 3 年目を迎えましたが、今年度の課題は下記の 3 つでした。
参加人数を増やす
共同制作の可能性を探る
高校生がプレゼンテーションをする
(1) は本学陶コースの参加人数が増えましたが、(2) と (3) については実現できないことになりました。新磯高校が合併によって相模原青陵高校になるという変わり目の時期にあたり、新しい状況下でのカリキュラム調整が難しかったためです。
このため、今回の活動は昨年と同様に、大学生のレクチャー、合同講評会、そして女子美祭見学の 3 つを行うことになりました。なかでも合同講評会は、両校にとって大変効果的であることが昨年度に判ったので、これに向けて本学陶コース 3 年生の授業を更新し、より効果を高めることができました。

1_ 女子美陶コース 4 年生によるレクチャー

2_ 自作歴や学んできたことをスライドを使って

3_ 女子美陶コース 3 年生による合同講評会

■成果

【第 1 回】打ち合わせ

日時：平成 22 年 5 月 26 日（水）14:30 ～ 17:30

場所：相模原青陵高校　陶芸実習室

平成 22 年度活動予定を検討。上述の状況により新しい試みは控えることにし、昨年と同じ 3 つの活動を行うこととしました。昨年度の活動から判ったことは、大学生と高校生が直に話すことが相乗効果をもたらすということでした。そこで今回は、昨年度以上に学生と生徒同士でお互いの考えを伝えあえる試みを実施しました。

4_ 合同講評会：スライドを交えながら

【第 2 回】女子美陶コース 4 年生によるレクチャー

日時：平成 22 年 9 月 17 日（金）13:15 ～ 17:00

場所：相模原青陵高校　陶芸実習室

本学陶コース 4 年生によるスライドレクチャー。2 人の 4 年生が、それぞれ自分が学んできた内容と自作歴を、スライドを使って説明しました。そして大学生としての総まとめである卒業制作への取り組みについて、自身の考え方を述べました。最後に、自作の作品＝実物を囲んで、会話形式で意見交換をしました。

5_ 合同講評会：高校生との質疑応答

【第 3 回】女子美陶コース 3 年次との合同講評会

日時：平成 22 年 9 月 30 日（木）13:25 ～ 17:00

場所：女子美術大学　陶芸実習室

本学陶コース 3 年次の後期講評会に、相模原青陵高校が参加しました。3 年次学生それぞれの 4 月～ 9 月までの制作進展状況について、学生ひとりひとりが提示し、それに対しての意見交換を行いました。本学 3 年生は、自分の制作テーマや制作プロセス、作品の変遷などについて、実物の作品とスライドを見せながら説明しました。説明後、高校生からの質疑に応じ、自分の説明が適切であったかについてを確認しました。また、アンケート用紙を配布し率直な感想を書いてもらい、その後の制作のための資料としました。高校生にとっては、美術大学の講評会という具体的な状況に参加することで、高校での美術活動について見直す良い機会となりました。

昨年度に較べ次の 4 つの点でより充実したものになりました。

1. 昨年度の合同講評の時期は前期でしたが、今回は後期に設定したので、本学 3 年次学生作品の完成度が高いものを見せることができました。
高校生に与える作品の印象が、昨年度より強いものになりました。

2. 昨年度は実物作品だけを見せての説明でした。制作途中のスライドが無かったため、制作プロセスについての質問に対し、解説が不十分になって

6_ 女子美祭作品鑑賞

7_ 工芸学科展示：本学学生が作品解説する

しまいました。今回は制作プロセスのスライド作りを授業課題に取り込むことで説明の準備を整えました。機材面でも解像度の高いプロジェクターを用意したので、昨年よりもわかりやすく伝えることができました。
3. スライド発表の練習を授業に取り入れて合同講評会に備えたので、昨年よりも明快な説明となりました。3 年次生は、他人に分かりやすく説明するためのトレーニングをすることが、自分自身の制作を整理して見直すのに有効であることに気づき、より積極的に制作に取り組むようになりました。
4. 上記 3 点のことから、高校生に昨年よりも強く伝わったことがあります。それは、美大生ひとりひとりがそれぞれのテーマを模索し続けているということ、そして、自分のテーマを作品として実現するために、日々制作上の問題点と取り組んでいるということです。
このことは、高校生にとってとても印象的だったようです。日々の制作姿勢に関するたくさんの感想や意見をもらえました。

【第 4 回】女子美祭作品鑑賞
日時：平成 22 年 10 月 23 日（土）
場所：女子美術大学
相模原青陵高校生が女子美祭を見学しました。女子美祭では学生が授業で制作した作品が学年別に展示されているので、それを見てもらい、本学の美術教育を作品を通して理解していただきました。特に工芸学科の展示場では本学学生が作品解説をして、高校生が制作者とじかに触れ合う機会を作りました。工芸学科の染、織、陶、ガラスの 4 コースそれぞれの展示場で、活発な質疑応答がありました。

■活動を終えて
陶芸コラボレーションは平成 22 年度をもってひと区切りとなります。お陰さまで、3 年間の活動は両校にとって良い効果をもたらしました。
本学陶コースにとっては、授業にプレゼンテーショントレーニングを取り入れるきっかけとなりました。美術を専門としていない方たちと美術大学生とのコミュニケーションについて、これからも学生と考えていこうと思います。高校生にとっては、自発性と持続性がもたらすものについて考える良い機会であったと思います。自発的に日々制作し続けている少し年上の大学生と触れ合うことで、高校生たちの心にも、なにごとかに積極的に取り組みたいという思いが湧いてきたようです。
最後に、この活動を共に進めてきた新磯高校・相模原青陵高校の先生方に感謝申し上げます。

8_ 工芸学科展示：本学学生が作品解説する

9_ 工芸学科展示：本学学生が作品解説する

10_ 制作者と語り合う場では活発な質疑応答も…

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

K_ 環境マッププロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 20 年 11 月〜平成 22 年 3 月
参加学生：芸術学科 2 年生
担当教員：芸術学科 佐藤美智子
場所：本学相模原キャンパス、その他相模原地域全般

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、芸術学科 2 年生の授業「ワークショップ研究」として 3 年目となる取組です。普段見過ごしがちな小さな発見を「グリーンマップ」手法を使い、地域を歩き、観察し、様々な視点を持って「地図」を作成します。グリーンマップとは、その地域での発見を、世界共通のグローバルアイコンと呼ばれる絵文字を使用して地図にあらわしたもののことです。

授業内で行われたワークショップを、授業後に考察し、1 冊の冊子にまとめあげるという内容で進められてきました。

【ワークショップ企画の流れ】

1. グループで担当するコースを決める
2. コースの下見
3. ワークショップのテーマ・コンセプトを決める
4. ワークショップに必要なツールを作る
5. 同じコースのグループ同士でワークショップを行う
6. ワークショップを行ったグループにインタビュー
7. 改善案・地域に向けて配布する広報マップについて考案
8. 中間発表
9. 改善案企画書・配布広報マップの作成
10. 全体発表

1_ 世界標準のグリーンマップ・アイコン例

2_ 気づいたことをスナップ＆メモ

3_ くまなく歩いて、マークと一緒にスナップ

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

K_ 環境マッププロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

■成果

ワークショップで体験したことや、集めた情報をもとに、最終課題としてグリーンマップを制作し、クラス全員でプレゼンテーションしました。グループによってオリジナルのアイコン、ホームページやすごろくなど自由でユニークな発想で相模大野の街での気づきを表現し、情報を共有しました。

活動から参加学生は、コミュニケーションの大切さ、判りやすく他者に伝えることの難しさ、計画の重要性を学びました。さらにワークショップを自ら企画することにより、その可能性の大きさを実感。他者の意見や価値観に触れ、互いに刺激し合うことで、新たな答えを導き得ることができました。このようなことからワークショップ手法による役割と効果の多様さに、改めて気付かされることとなりました。

【ワークショップ研究授業】

ワークショップ研究の授業では、まずワークショップに参加する側を体験してから、企画を行います。企画を行うに当たっては、美術館学芸員の方から美術館ワークショップについて、ファシリテーターの役割、ワークショップとファシリテーターにとって大切なことなどを映像やスライドを見ながら学びました。さらにワークショップの企画に重要なグリーンマップについて学び、1 グループ 6 ～ 7 人の 6 グループを作りました。ワークショップコースを下見したうえでテーマやコンセプトを試案し、各班ごとにワークショップを企画しました。

実際にワークショップを実施したのちは、体験者の意見を取り入れた改善案を企画することで完成度を高めました。また、地域に配る広報ツールを製作、改善案をもとに最終発表を行いました。

【各班のテーマと活動報告】

・1 班：「街中にある「ナニコレ !?」を探す」

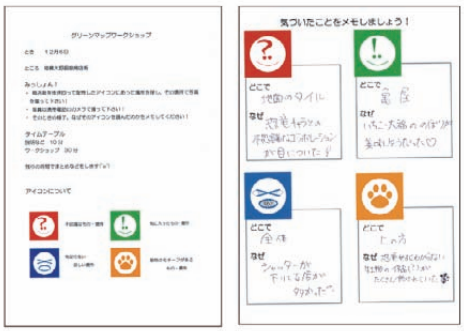
時間に追われる通勤者、通学者の多い駅前周辺で、あえて普段気にしない突っ込みどころ満載のものを探しました。街のナニコレ？を投稿してゆく参加型サイト、携帯電話用の投稿用サイトも用意しました。

狙いを的確に伝え、共有することを学びました。

・2 班：「地元の人々に、わたしたち学生が、いかに迷惑をかけているのか」

すごろくで楽しみながら相模大野駅周辺の危険な場所に気付けるような、すごろくタイプのマップ制作をしました。

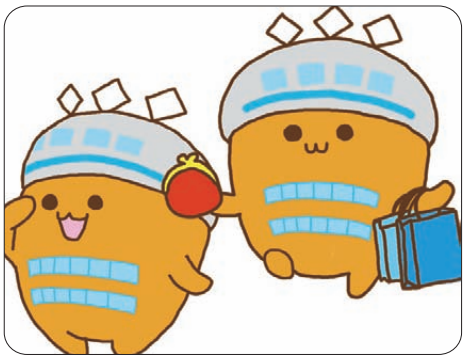
ワークショップの企画、参加者を同時に体験し、楽しむことができました。



4_ アイコンも使って発見をメモする

5_ 活動報告書「おーちゃんといっしょ」

6_ キャラクター「おーちゃん」



7_「おーちゃん」キャラバリエーション

・3 班：「相模大野銀座商店街を知ってもらうきっかけをつくる」
商店街の活性化、存在の重要性などを考えながら、カラフルで特徴あるお店などを紹介できるよう映像のかたちでマップを制作しました。
マップ制作を通して地域の捉え方が変化しました。企画者としての経験を活かしたいです。

・4 班：「安全」
駅前の学校周辺の環境を知り、良い所、悪い所を探し改善策をあげられるよう、アルバム形式のマップを制作しました。
ワークショップについて、授業を通して多く学びました。

・5 班：「相模大野中央公園の「良い所、悪い所」探し」
安全だと思っている公園に潜む、意外な危険、特徴などを探り、公園のパンフレットをリデザインしました。
普段向けないことに目を向け、深く考える機会を得られました。参加の楽しさ、企画の難しさも実感しました。

・6 班：「相模大野銀座商店街を身近に感じてもらう」
写真を通して商店街の魅力を伝えるフリーペーパー「JOTTO PEPPER」を制作。
区域をまわることで、商店街が地元と密着していること、シャッターの閉じた商店の多い事にも改めて気付きました。

【グリーンマップ広報活動】
広報メンバーにより、実際にグリーンマップを作成し、発行しました。冊子の全体的なコンセプトは、見やすく手に取りやすいようなデザインにし、こどもが見ても楽しめるような冊子作りを目指しました。イラストも、動物やポップなものにし、親しみやすさを表現しました。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

K_ 環境マッププロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

8_1 班：ナニコレ !? が見られるブログ

9_2 班：問題解決を工夫したツール

10_3 班：DVD ジャケット＆映像のひとこま

11_4 班：アルバム形式のグリーンマップ

12_5 班：公園パンフレットをリデザイン

13_6 班：フリーペーパー表紙 & 誌面

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

L_ 環境ポスタープロジェクト　http://www.joshibi.net/brand

実施期間：平成 21 年 4 月〜継続中
参加学生：メディアアート学科他
担当教員：アート・デザイン表現学科 川口吾妻
場所：本学相模原キャンパス
連携先：IAA、株式会社電通

■プロジェクトの趣旨・目的
アートやデザインを学ぶ学生に環境問題をテーマとしたポスター制作を呼びかけることにより、意識や理解を深めさせると同時に、プレゼンテーション能力や広告技術向上を目指す教育プログラムとして実施しました。

■成果
「サスティナビリティ（持続可能性）」環境ポスター制作ワークショップ
一昨年の第 1 回「IAA 電通世界学生ポスターコンペティション〜気候変動〜」では、世界 13 カ国・地域から 145 点、本学生からも 46 作品の応募作品があり、世界グランプリや地域最優秀賞が決定しました。
昨年のテーマは、「生物多様性」。学生にポスター制作を呼びかけ、約 43 点の作品が集まり、応募しました。ポスター制作を通して、環境問題をより意識し、理解を深めることができました。

■今後について
平成 23 年 4 月 11 日より 5 月 10 日まで、相模原校舎 2 号館 2 階 224 教室前ロビーにて、第 2 回「IAA 電通世界学生ポスターコンペティション〜生物多様性〜」報告展を開催しました。
また、「サスティナビリティ（持続可能性）」をテーマに引き続き学生からポスターの応募を募り、今年度もコンペティションに参加します。

※今年度は、「サスティナビリティ（持続可能性）」がテーマですが、応募締切の日程が延び、現在も募集告知をして呼び掛け中です。
また、GoogleMap/Earth の機能を活用した「IAA 電通世界学生ポスターコンペティション受賞作品」を閲覧できる Web ページを、IAA と連携し制作・公表しました。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

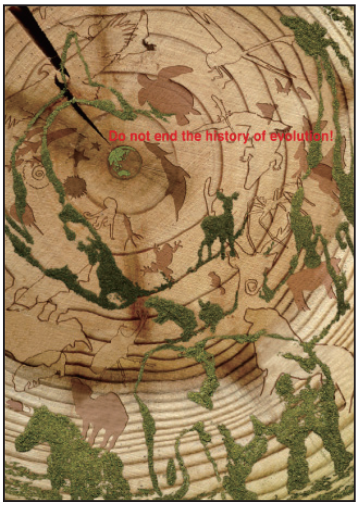
L_ 環境ポスタープロジェクト

http://www.joshibi.net/brand

作品画像タイトル

女子美学生作品（image1,2,3,4,5）

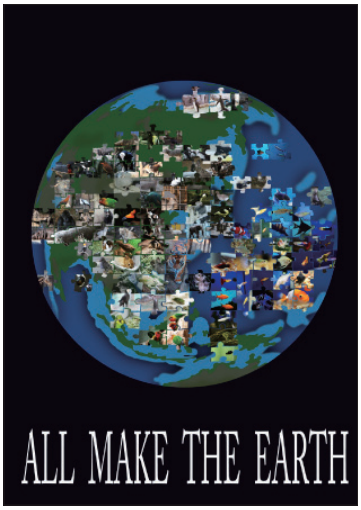
アワード受賞作品（image6,7,8）



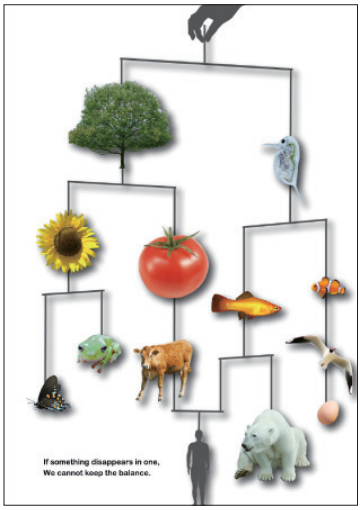
1_Ai Shimamine

2_Ayami Fujita

3_Haruka Kawazoe

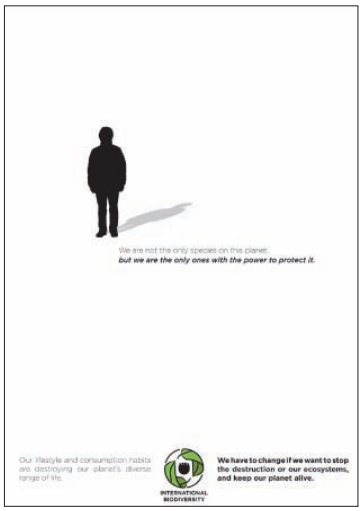


4_Juri Nakano

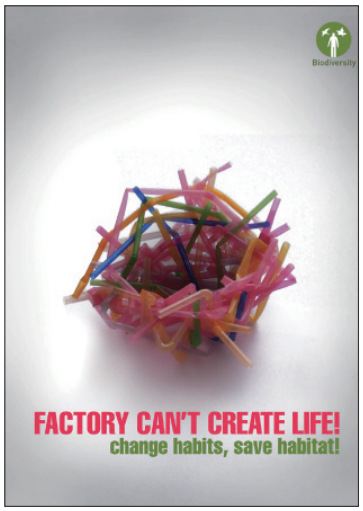


5_Uchida Yui

6_world 2nd.



7_world 3rd.



8_world champion

女子美術大学 | 文部科学省「平成 21 年度　質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信　素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム

http://www.joshibi.net/brand

平成 22 年度報告サイト PDF 版

2011 年 4 月作成
Copyright 2010 JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved.

女子美術大学　相模原キャンパス：〒252-8538　神奈川県相模原市南区麻溝台 1900　杉並キャンパス：〒166-8538　東京都杉並区和田 1-49-8

お問い合わせ：教育研究事業部　042-778-6144